國學院大學学術情報リポジトリ

Research report of the archaeological collection owned by Shirahama jinja, Shizuoka pref.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002011

國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

静岡県下田市

白濱神社所蔵考古資料
調査報告

2011

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

例　言

1．本書は、平成19（2007）年度～平成22（2010）年度に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ（責任担当者：椙山林継［～平成21年度］・吉田恵二［平成22年度～］）が実施した、伊古奈比咩命神社（白濱神社）所蔵考古資料調査の報告書である。

2．調査計画の立案と遂行に当たっては、杉山林継（当センター客員教授・センター長）、吉田恵二（当センター兼担教授・当グループ責任担当者）の指導と助言を受けた。

3．本調査に係る第１次予備調査は、静岡県下田市白濱神社の例大祭関連神事を記録するため、平成19（2007）年10月28日から同月30日まで実施し、第２次予備調査は、同神社が所蔵する考古資料の概要を確認するため、平成20（2008）年９月17日に行った。また、本調査は、同資料の整理・研究、及び公開・活用を目的として、平成22（2010）年２月23日から同月28日まで実施した。

4．第１次予備調査は、深澤太郎（当センター兼担助手［調査当時］）、田中大輔（当センターＰＤ研究員［調査当時］）、加藤元康（当センターＰＤ研究員）が参加した。

5．第２次予備調査は、内川隆志（当センター准教授）、田中大輔（当センターＰＤ研究員［調査当時］）が担当し、深澤太郎（当センター兼担助手［調査当時］）、阿部昭典（当センター客員研究員）、高慶秀（当センター外国人研究員）、塩谷風季（本学大学院文学研究科［調査当時］）が参加した。

6．本調査は、内川隆志（当センター准教授）、深澤太郎（当センター助教）、石井匠（当センターＰＤ研究員）が担当し、加藤元康（当センターＰＤ研究員）、新原佑典（当センターリサーチアシスタント［調査当時］・ＰＤ研究員［現在］）が参加した。また、有志として中村耕作（当センター兼担助手）の協力があった。整理・編集作業には、宮川博司（当センターリサーチアシスタント）、楠惠美子・山口晃（本学大学院文学研究科）が加わった。

7．本書の執筆者については、それぞれ担当箇所の末尾に文責を示した。

8．資料の計測・記録は、調査参加者で分担した。遺物写真の撮影は、加藤元康による。

9．図表の作製は、深澤太郎・石井匠・楠惠美子・山口晃が担当した。

10．本調査に当たっては、白濱神社、下田市教育委員会、原嘉孝氏（白濱神社宮司）、外岡龍二氏（下田市文化財保護審議会副会長）、増山順一郎氏（下田市教育委員会生涯学習課主事）、藤井建彦氏（下田市社会教育指導員）、原政一氏（郷土史研究家）をはじめとする現地の方々より、多大な御厚意を賜った（順不同）。ここに記して、深甚なる謝意を表すると共に、記載漏れの方々には御海容を乞う次第である。

11．整理作業に際しては、三橋健氏（本学大学院客員教授）、青木豊氏・笹生衛氏（当センター兼担教授）、齊藤智朗氏（当センター准教授）、中村大氏（独立行政法人総合地球環境学研究所プロジェクト研究員・当センター共同研究員）、栗木崇氏（熱海市教育委員会学芸員・当センター共同研究員）、土屋健作氏（女子美術大学非常勤講師）、杉山章子氏（当センター作業協力者）、廣木健太郎氏（本学大学院文学研究科）の御協力を得た（順不同）。ここに記して、篤い御厚意に感謝申し上げたい。

12．本書は、内川隆志監修の下、深澤太郎、石井匠、田中大輔（当センター共同研究員・名古屋経済大学市邨高等学校教諭）が編集した。

目　次

例　言
第１章　調査に至る経緯……（内川隆志・深澤太郎・石井匠・田中大輔）133
第２章　地理的・歴史的環境……（深澤太郎・宮川博司・楠惠美子・山口晃）134
第３章　調査経過……（深澤太郎・石井匠）138
第４章　調査成果……（石井匠）139
　第１節　原田遺跡出土資料……（石井匠・中村耕作）139
　第２節　小長田神明遺跡出土資料……（深澤太郎）141
　第３節　火達山遺跡出土資料……（内川隆志・深澤太郎・新原佑典）142
　第４節　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料 ……（内川隆志・深澤太郎）145
　第５節　白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料 ……（深澤太郎）147
　第６節　出土地不明資料……（内川隆志・加藤元康）148
第５章　総括……（深澤太郎・石井匠）150
資料編　下田の和鏡……（内川隆志）162

挿図目次

第１図　白浜周辺の遺跡分布図…… 135
第２図　原田遺跡出土資料…… 140
第３図　小長田神明遺跡出土資料…… 141
第４図　火達山遺跡出土資料（１）…… 143
第５図　火達山遺跡出土資料（２）…… 144
第６図　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料　146
第７図　白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料 … 147
第８図　出土地不明資料…… 148

表 目 次

第１表　白浜周辺の遺跡一覧…… 135
下田市出土・伝世和鏡一覧…… 162

図版目次

図版１　『伊古奈比咩命神社』版下（火達山発見祭器類・境内発見經石及古錢）　國學院大學蔵
図版２　原田遺跡出土資料、小長田神明遺跡出土資料
図版３　火達山遺跡出土資料
図版４　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料１
図版５　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料２
図版６　白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料、出土地不明資料
図版７　白濱神社境内の遺跡、火達山遺跡、白濱経塚、伝旧社地 明神、資料保管状況
資料編１　白濱神社境内遺跡 古宮山地区
資料編２　両神社
資料編３　日枝神社、戸崎八幡神社
資料編４　湯原八幡神社、諏訪神社、進士氏蔵

第１章　調査に至る経緯

海原遥か南方に伊豆諸島を擁する旧伊豆国は、大場磐雄氏が唱導した「神道考古学」揺籃の地であり（大場1960）、同氏らが実施した静岡県下田市洗田遺跡における昭和２（1927）年の発掘調査以来（谷川1927ほか）、國學院大學関係者・関係機関が主要な研究フィールドの一つとしてきた地域である。とりわけ、この洗田遺跡で実施した調査をはじめ、熱海市史編纂に係る多賀神社境内宮脇遺跡の発掘調査など（大場1967、小野1972）、早くから古墳時代の「祭祀遺跡」研究に足跡を残してきたことは、今更強調するまでもあるまい。また、式根島の吹之江遺跡（吉田ほか1987）・吹之江東遺跡（吉田・前田編1987）、伊豆大島の和泉浜遺跡Ｃ地点では（内川・山本編1995）、古代神祇祭祀の実像に迫る貴重な発見が相次いだ。更に、熱海市の伊豆山経塚（藤本・内川・須藤編2006・2007）、利島の阿豆佐和気命神社境内遺跡（青木・内川・須藤編2005）・堂ノ山神社境内遺跡（青木・内川編1994）・八幡神社境内遺跡（青木・内川・金成編1999）、三宅島の中郷遺跡・物見処遺跡（吉田編1982、吉田編1983～2000）、御蔵島の神ノ尾遺跡（青木・内川編1994）、八丈島の三根経塚（吉田編2006）、八丈小島の鳥打遺跡・宇津木遺跡など（青木・内川・粕谷編1994）、中世・近世から現代に至る信仰遺跡については、本学考古学研究室・考古学資料館が組織的な調査を行い、通史的な地域信仰の具体像を論じるための資料的蓄積を重ねてきた。

ちなみに、この旧伊豆国は、『延喜式』神名帳登載の式内社が濃密に分布することでも注意される。もっとも、式内社の比定は容易でなく、伊豆の代表的な神である三嶋神さえ、東京都三宅島三宅村の富賀神社や、静岡県下田市の白濱神社から、同三島市の三嶋大社に至る勧請経緯、乃至は勧請の有無について確言することは難しい。とは言え、国史の断片的な記録からは、噴火造島の業に神を見出す古代人の感性や、伊豆の神々に対する神階奉授の過程などを窺い知ることができる。また、三宅島の壬生家、新島の前田家、そして白浜の原家などに伝わる『三嶋大明神縁起（三宅記）』からは（三橋1978）、中世・近世における在地的な三嶋信仰の一端を垣間見ることができる。恐らくは、このような文献史料や物語類と、それぞれの同時代的な考古資料を相互に検討することで、より豊かな歴史像を描いていくことが可能となるであろう（森谷1977、深澤2009）。

実際、三宅島の富賀神社境内では、大正13（1924）年の拝殿改築時に高さ76cmほどの須恵器甕が出土しており、東京帝国大学人類学教室で鑑定の結果、８世紀代に属するものと判断された（稲村・豊島1958）。加えて、東京都教育委員会が三宅御蔵文化財総合調査を実施した昭和31（1956）年以前に、境内裏の富賀浜から古墳時代の勾玉・管玉・耳飾が見つかっていたという（稲村・豊島1958）。この富賀浜では、福岡県宗像市沖ノ島遺跡・岡山県笠岡市大飛島遺跡・三重県鳥羽市神島遺跡など、古代の主要な海上交通路に設けられた祭祀遺跡で共通して出土する奈良三彩片も採集されている（三宅村教育委員会編2008）。また、12世紀後半までには現地に鎮座していたと見られる三嶋大社（三嶋神社）の境内では、三島市教育委員会による発掘調査の結果、巨石を伴う祭祀遺構や、それに伴う多数のかわらけ類などが確認された（鈴木編1990、辻編1997）。同様に、式内伊古奈比咩命神社に擬せられる白浜海岸鎮座の白濱神社でも、境内から出土したとされる土器・和鏡・礫石経などが伝わっており、考古学的側面からも同神社史の一端を窺い知ることが可能である。これらの資料は、後述するように平安時代末以降の遺物を主体とするものの、古代から中世・近世に及ぶ三嶋信仰の変容過程や、伊豆半島・諸島における祭祀儀礼の共通性・関連性を追求していく上で、欠くことのできない情報を提供してくれるに違いない。

ところで、この白濱神社所蔵資料については、本学講師・神祇院嘱託であった大場磐雄氏の編になる社誌『伊古奈比咩命神社』が、昭和18（1943）年以来70年近く原典報告として活用されている（大場1943）。そこで、本学の校史・学術資産を活用しつつ、「神道」の成立・展開や、日本列島の信仰史に関する考古学的研究を推進している当センターでは、平成21（2009）年度の調査対象を白濱神社所蔵資料に定め、その再資料化、並びに学史的・考古学的位置付けの再検討を計画した。なお、同社では、縄文時代の石棒も所蔵していることから、ここでは白浜地域における先史時代以降の信仰資料全般を調査研究の対象としておく。　（内川・深澤・石井・田中）

第２章　地理的・歴史的環境

伊豆半島・伊豆諸島の地形と環境

旧伊豆国を構成する地域は、静岡県東部の伊豆半島と、東京都に属する伊豆諸島からなる。両者は、北アメリカプレートへ沈み込むフィリピン海プレートの東縁に位置し、伊豆・小笠原弧と呼ばれる火山弧を形成しているため、地震や噴火の多発地帯として知られる反面、豊かな温泉に恵まれてもきた。

そのうち伊豆半島は、大部分を山地に占められており、天城山脈からの狩野川が北流する田方平野、すなわち古代田方郡の中枢を除くと広い平坦地は見られない。賀茂郡・那賀郡域にあたる、丹那山地東麓から半島の中ほどを横断する天城山脈以南にかけては、山間部の中小河川沿いや、河口部に集落域が点在する。周りは、西の駿河湾、東の相模灘、そして南の太平洋に囲まれており、南から運ばれてくる夏の空気は、天城山周辺に多量の雨をもたらしている。

また、伊豆大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島・八丈小島・青ヶ島や、大小の岩礁からなる伊豆諸島は、殆どが火山島であり、平坦地は海沿いの僅かな地域に認められるに過ぎない。御蔵島や八丈島以外では、恒常的に水の流れる河川が見られず、かつては飲料水などを天水に頼る島が多かった。なお、伊豆大島から神津島までを北部伊豆諸島、三宅島以南を南部伊豆諸島と呼ぶこともあり、日本列島南岸を東へ流れる黒潮は、主に三宅島と八丈島の間を通過する。ちなみに、伊豆諸島では黒潮を「黒瀬川」と呼ぶこともあるが、これは貧栄養のため透明度の高い黒潮が、あたかも青黒い川のように見えるからである。

このような伊豆地域は、豊かな可耕地の広がる半島の北部と、南部から伊豆諸島にかけての山がちな区域に大別できる。その伊豆北部は、足柄峠より東を「坂東」と呼ぶように、列島を東西に結ぶ東海道の境界地帯に程近く、古くから三島に国府や国分寺、或いは三嶋大社などが置かれた。一方、半島南部から伊豆諸島にかけては、前近代まで三島・下田間の下田街道以外に幹線陸路を持たず、陸上交通に困難を伴っていたものの、黒潮の流れに乗った海路は「海の東海道」と言っても過言ではない。

なお、今回の調査地である下田市白浜は、半島東海岸も最南端に近い旧白浜村であり、古くからの字境に倣って北から板戸・長田・原田の３地区に分かれている。そのうち板戸は、一色海岸と呼ばれる磯浜に面し、長田と原田は、白濱神社が鎮座する古宮山を中心として南北約２kmに広がる白砂の白浜海岸を望む。この白浜海岸は、遥かに伊豆諸島を望む石灰質の美しい砂浜だが、大型の台風などが通り過ぎた後は、一面に円礫が散布する浜に変貌するという（土編2010）。これらの浜辺を除いた海岸線は、殆どが切り立った断崖であり、平坦地も国道沿いの僅かな範囲に限られる。なお、長田の西側には、標高約343mの高根山が控えており、そこから広がる谷戸が、海岸に向けた沢筋を形成している。（楠）

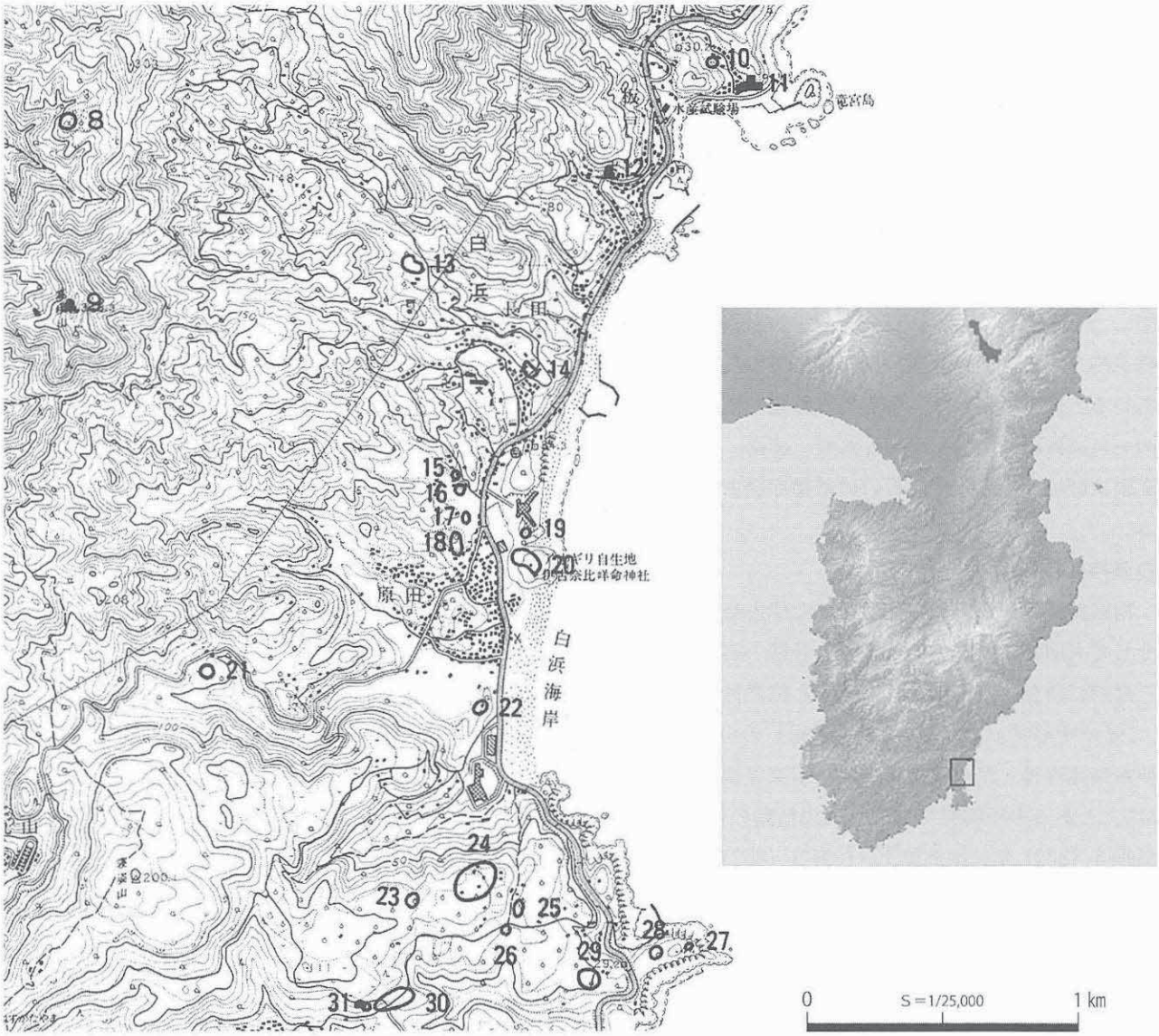
白浜周辺の歴史

では、南伊豆地域に関する考古学的な知見を瞥見しておこう（静岡県教育委員会文化課1988、下田市史編纂委員会2010）。残念ながら、今のところ旧石器時代の様子は窺う術がない。しかし、縄文時代については、神津島産の黒曜石が東海・関東地方を中心に広く流通する事実や、河津町見高段間遺跡に見るような石棒の濃密な分布が知られている。白浜地域でも、縄文時代中期の遺物を主体とする長田遺跡（№14）・境の久保遺跡（№26）で石棒が発見されており、本書でも原田遺跡（№18）で見つかったとされる事例を報告する。また、火達山遺跡（№19）では、伊豆諸島産と見られるオオツタノハ貝で作られた腕輪などが発見されており、半島・諸島間の盛んな往来を証している。弥生時代の遺跡としては、南伊豆町日詰遺跡で周溝墓群を伴う中期末から後期にかけての集落が確認されており、白浜にも弥生時代後期の白浜神社境内遺跡（№20）などが存在する。

ところで、古墳時代中期以降、祭祀遺跡が数多く営まれたことは、伊豆南部の大きな特色として取り上げることができよう（外岡1978）。三倉山を仰ぐ下田市吉佐美の洗田遺跡は、大場磐雄氏の提唱した神道考古学発祥の地であり、伊豆諸島を望む海岸沿いの岬にも古墳時代後期の三穂ヶ崎遺跡（№27）などが認められる。夷子島遺跡では、手づくね土器や土師器・須恵器と共に、火を焚いた痕跡が炭化物として残されていた（桜井・杉山・神

第１表　白浜周辺の遺跡一覧（静岡県教育委員会文化課1988一部改変）

県No.	名称	所在	種別	時代・時期(遺物)
8	田代山(高嶺越)遺跡	白浜原田(河内田代山)	包含地	縄文前期(縄文土器・石斧・磨石・磨製石斧)
9	高根山経塚	白浜原田(河内高根山)	経塚	中世・近世(一字一石経)
10	一色遺跡	白浜一色	包含地	縄文中期・縄文後期(縄文土器・打製石斧・磨製石斧)
11	一色陣屋	白浜板戸	城館	近世
12	禅福寺経塚	白浜板戸	経塚	中世・近世(一字一石経)：２基
13	タタラド遺跡	白浜大替地	製鉄	平安(鉄滓・鞴羽口)
14	長田遺跡	白浜長田	包含地	縄文中期・縄文後期(縄文土器、石棒、石鏃、磨製石斧)
15	小長田神明遺跡	白浜小長田神明	包含地	古墳後期(埴輪)、奈良・平安(土師器・須恵器)
16	白浜中学校遺跡	白浜長田	包含地	縄文(縄文土器)
17	白浜宮前遺跡	白浜宮前	包含地	奈良・平安(土師器・須恵器)
18	原田遺跡	白浜原田	包含地	縄文(石棒)、平安(鉄滓)
19	火達山遺跡	白浜原田	包含地	縄文(縄文土器・貝輪)、古墳(土師器)、平安(土師器・須恵器)
20	白浜神社境内遺跡 (古宮山地区) (白濱経塚)	白浜原田	包含地 祭祀 経塚	縄文(縄文土器)、弥生(弥生土器)、古代(土師器・須恵器) 中世(御正躰・和鏡) 中世・近世(一字一石経・銭貨)
21	尾平遺跡	白浜尾平	包含地	縄文(縄文土器・石匙)
22	ビワの山遺跡	白浜ビワの山	包含地	弥生(弥生土器)
23	女郎山遺跡	白浜女郎山	包含地	縄文(縄文土器・石皿・石鏃)、弥生
24	女郎畑遺跡	白浜女郎畑	包含地	縄文早期・縄文中期(縄文土器・磨石・石臼)
25	下山遺跡	白浜下山	包含地	縄文(磨製石斧)
26	境の久保遺跡	白浜境の久保	包含地	縄文(磨製石斧・石皿・石棒)
27	三穂ヶ崎遺跡・修験窟	白浜原田三穂ケ崎	祭祀	古墳後期(石製模造品・勾玉・丸玉)、中世(不動明王壁画・墨書)
28	三穂ケ崎台場	白浜三穂ヶ崎	台場	近世
29	小撫遺跡	白浜原田小撫	包含地	縄文(縄文土器・石鏃)
30	上ノ山遺跡	白浜上の山(柿崎上の山・大平)	包含地	縄文中期(縄文土器・磨製石斧・打製石斧・石鏃)、弥生
31	上ノ山洞穴遺跡	白浜上の山(柿崎上の山)	横穴	古墳後期(ガラス製小玉・須恵器・土師器)
57	板戸遺跡	白浜板戸	包含地	縄文(縄文土器・石棒・石斧・石鏃)



第１図　白浜周辺の遺跡分布図（静岡県教育委員会文化課1988一部改変）

尾1962)。なお、伊東市より南の東海岸沿いでは、これまで高塚古墳の発見例がなく、下田地域の首長墓としては、後期の上ノ山洞穴墓（№31）・了仙寺洞穴墓が認められるに過ぎない（宮本1984)。しかし、後述する通り、白浜の小長田神明遺跡（№15）で埴輪が出土しており、早くに墳丘を失った未知の古墳に伴うものかと疑われる。

古代の伊豆は、天武天皇９（680）年に、駿河国から二郡、すなわち田方郡と賀茂郡を割いて一国とされた。しかし、藤原宮から出土した木簡に「伊豆国仲郡」の文字が見えることから、伊豆国建置から程なく、半島南西部に那賀郡が設けられた事実が窺われる。また、平城宮出土荷札木簡が示すように、伊豆国からは、「荒堅魚」や「煎汁」が貢納されていたようであり、漁撈が主たる産業の一つであったものと推察される。ちなみに伊豆国は、対馬国・壱岐国と同じく神祇官の卜部を輩出することで知られており、室町時代に唯一神道を興した吉田氏も、伊豆の卜部氏出身であった。白濱地域を含む賀茂郡に目を転じてみると、郡衙が設けられたであろう賀茂郷のほか、築間郷・稲梓郷・川津郷・三島郷などが置かれており、三島郷が伊豆諸島、稲梓郷が白浜周辺に相当する。稲梓郷は９世紀頃に大社郷と改称したようだが、これは後に白濱神社と呼ばれることになる伊古奈比咩命神社が、「名神大」に列したタイミングと重なる可能性が高い（原1993)。なお、伊豆南部では、平安時代末期から鎌倉時代初期を中心とする製鉄遺跡が数多く知られており、白浜周辺でもタタラド遺跡（№13）や原田遺跡（№18）から鉄滓が採集されている。その性格については、天永３（1112）年に外宮領となった蒲谷御厨が、下田市田牛から南伊豆町青市・湊にかけての地に比定されており、例年鍬50勾を納める定めであった事実との関連に議論がある（佐藤1990)。このような問題の妥当性は兎も角、伊豆南部と外宮との間に点的な相互関係があった事実は極めて興味深い。

さて、鎌倉時代の伊豆国は、現在の韮山を本拠とする北条氏が守護として支配し、室町時代に入ると鎌倉公方の支配を受けた。長禄元（1457）年には、室町幕府と対立した鎌倉公方の足利成氏に対抗して、新たに足利政知が派遣されたものの、政知は鎌倉に入れず韮山の堀越を拠点とする。しかし、文明14（1483）年には、成氏との和睦が成り、政知の支配領域は伊豆一国に限定されることとなった。更に、この堀越公方も、政知の後を襲った茶々丸が、明応２（1493）年に伊勢新九郎（北条早雲）の攻撃を受けて滅亡する。以後、伊豆の支配権は、天正18(1590)年の小田原の役に至るまで、後北条氏の手中に握られた。そのうち白浜地域は、南北朝期の暦応３(1340)年に、南朝方に属した入江三郎衛門の白浜村地頭職が走湯山へ移されて以来、長く走湯山領とされてきた。三穂ヶ崎遺跡（№27）の修験窟には、15世紀から16世紀にかけて走湯山の修験者らが残した墨書や不動明王像が描かれている。近世の白浜は、幕府の直轄領や旗本領とされたが、後に沼津藩も白浜の一部を領することとなり、板戸の一色に陣屋（№11）が置かれた。また、本書で紹介する白濱神社境内の経塚（№20）と同様に、高根山山頂の高根山経塚（№９）や、板戸の善福寺経塚（№12）では、礫石経が出土しているというが、その詳細は不明である。

（楠・山口）

白濱神社の沿革

白濱神社は、式内社に列せられた伊古奈比咩命神社に相当する。三嶋大明神と、その後后である伊古奈比咩命、そして大明神の随神である見目・若宮・剣ノ御子を祀ることから、近世には「五社大明神」とも呼ばれた。また、三島市に所在する三嶋大社の本宮と位置付けられたため、「古宮山大明神」と称されたこともある。

「イコナヒメ」の名は、『釈日本紀』の引く『日本後紀』天長９（832）年５月癸丑条に「伊豆国言上。三嶋神。伊古奈比咩神。二前預名神。此神塞深谷摧高巌。平造之地。二千町許。作神宮二院。池三処。神異之事。不可勝計。」とあるのが初見であり、火山活動の神異により三嶋神と共に「名神」に預かったことが知られる。その後、嘉祥３（850）年に従五位上、仁寿２（852）年に正五位上の神階が奉授された。延長５（927）年編纂の『延喜式』神名帳によれば、伊豆国における式内社92座（賀茂郡46座・田方郡24座・那賀郡22座）のうち、名神大に預かっていたのは、賀茂郡の伊豆三嶋神社・伊古奈比咩命神社・物忌奈命神社・阿波神社、そして田方郡の楊原神社のみである。なお、康永２（1343）年の奥書を持つ『伊豆国神階帳』は、冒頭に三嶋大明神の一族を含む主要な神々を「正一位 三嶋大明神／一品 きさきの宮／一品 当きさの宮／正五位上 第三王子并十八所御子達／正一位 千眼大菩薩／従五位上 六所王子（後略)」と列挙する（三橋編1999)。伊古奈比咩命は、『続日本後紀』承和７（840）

年９月乙未条に「伊豆国言。賀茂郡有造作島。本名上津島。此島坐阿波神。是三島大社本后也。又坐物忌奈乃命。即前社御子神也。新作神宮四院。石室二間。屋二間。闇室十三基。（後略）」とあるように、神津島の阿波神が三嶋神の本后を主張していることから、後后である「一品 当きさの宮」に該当するのであろう。

ところで、『三嶋大明神縁起（三宅記）』などのように、三嶋大明神の本宮は三宅島にあると説く伝承があり、賀茂郡「三嶋郷」が伊豆諸島に相当することについては異論無いが、「稲梓郷」が「大社郷」と改称した９世紀頃には、三嶋神と伊古奈比咩神を祀る社が現白濱神社鎮座地に存在した。また、『吾妻鏡』が語る通り、挙兵を決意した源頼朝は、治承４（1180）年８月17日の「三嶋社神事」に際して安達盛長を遣わして奉幣し、その晩に目代山木兼隆の館を襲っていることから、この段階では国府付近の現三嶋大社鎮座地にも三嶋神社が存在したようである。このように、三嶋神社の勧請過程については不詳な点が多いものの、白浜から三島へ勧請されたのは、国司巡拝の便を図ってのこととする見解が最も妥当であろう（大場1943）。なお、中世以降の白濱神社においては、神仏習合的な信仰が盛んであった。本書でも後述する通り、嘉祿元（1225）年12月には、若宮の御正躰を忌部能次が奉納している。現在も鎌倉時代後期の薬師如来坐像が祀られているが、これは三嶋大明神の本地仏である。薬師如来を本地とする三嶋大明神や御子神と、観音菩薩を本地とする例が多い后神がセットとなって祀られるパターンは（土岐1981、深澤2010）、伊豆諸島の神社や白濱神社に共通するものとして無視し得ない。

このような世界観は、15世紀までには成立していたと見られる『三宅記』に示されており、その書写本が三宅島神主の壬生家、新島神主の前田家、そして白浜神主の原家などに伝わってきた（三橋1978）。具体的な内容は、大略①天竺を追放され（蛇体にされ）た王子である一大薬師（三嶋大明神）が、唐・高麗を経て日本に辿り着き、神々と海底の石を焼いて創造した伊豆諸島に后や御子を住まわせる。②箱根の三姉妹を追ってきた大蛇に三太刀を浴びせ（四分割して）、彼女らを大明神の妻として三宅島各所に住まわせる。しかし、蛇の尾に目を潰された女神に嫉妬した長女が、幼い王子と入水して石になってしまう。③壬生家始祖である壬生御館は、大明神の代官たるレガリア―神体「石のしやく」を与えられる。そして、三宅島を四郷（阿古・伊豆・神着・坪田）に分割し、自身と后らの宮を置いた大明神は、ついに石神として垂迹する、という３つの物語で構成されている。個々の物語に登場する人物や事象は、別の物語と相互に変換できるものであり、「〔一人／多数〕の子を持つ親の愛情が〔過大／過小〕であったために、〔男／女〕は〔蛇／鳥〕となって〔水底／山上〕へ身を追われ、自然神・水神である〔蛇と同化して／蛇を切って〕、〔島々を作り／村落を分割し〕、〔女／男〕は石神となる」という構造的共通性を見せる（深澤2009）。つまり『三宅記』は、単なる昔話ではなく、伊豆諸島世界や三嶋信仰の淵源を繰り返し語っているのだ。

伊豆諸島との関係で言えば、神事祭礼に白濱神社独特のものがある。とりわけ、10月28日夜の火達祭、29日の例大祭、30日の御幣流、すなわち旧暦では９月20日・21日に行われていた例大祭関連神事が特筆に値する。火達祭は、夜火を焚いて伊豆諸島の神々にマツリの始まりを告げる神事と伝えられ、現在は神社裏の浜辺で行われているが、かつては神社の北側に位置する火達山の頂で行われていたという（図版７）。また、御幣流は、神社裏の大明神岩から御幣を流す神事である。この季節には、「御幣西」と呼ばれる西風が吹き、御幣を伊豆諸島まで運んでくれると信じられてきた。（深澤）

『伊古奈比咩命神社』と大場磐雄

白濱神社、すなわち伊古奈比咩命神社の歴史については、早くから足立鍬太郎氏の研究があり（足立1920）、同氏編の『南豆神祇誌』などにも取り上げられている（足立1928）。しかし、関連史資料を網羅的に整理し、神社の通史を一書にまとめたものは、大場磐雄氏の手になる『伊古奈比咩命神社』を措いてほかにない（大場1943）。この書は、伊古奈比咩命神社奉賛が皇典講究所礼典課に委嘱して出版したもので、神祇院考証課嘱託でもあった國學院大學講師の大場氏が編集を担当し、昭和18（1943）年に刊行された。本学には、同書の稿本を製本したものが残されている（國學院大學伝統文化リサーチセンター2011）。そこには、写真図版の一部も収められており（図版１）、刊本では不鮮明な画像についても、今後の新たな活用が期待できる。（宮川）

第３章　調査経過

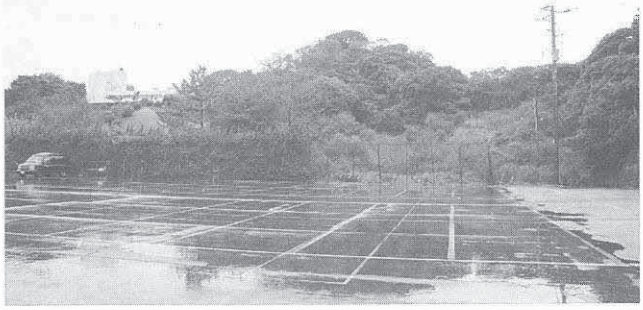
２月23日（火）　８時、大学より車両にて伊豆へ向け出発。途中、伊豆の国市神島字小室付近の輝石安山岩柱状節理露頭を観察。13時半、下田市教育委員会訪問。担当の増山氏に調査内容を説明し、改めて協力を依頼する。午後は、古墳時代の祭祀遺跡である美穂ヶ崎遺跡や、同所々在の修験窟のほか、縄文時代の石棒などが出土したとされる周辺遺跡を踏査した。また、偶然に郷土史研究家の原政一氏宅を訪問する機会を得、同氏所蔵の考古資料を拝見。三穂ヶ崎遺跡出土資料の出土状況や、出土時に炭化物が伴っていた事実などについて聴き取りができた。

２月24日（水）　10時、白濱神社に参拝後、内川・深澤・加藤・新原は、同社所蔵考古資料の実測・写真撮影等を開始した。先ずは、資料全体の様相を把握し、大場報告『伊古奈比咩命神社』との対応関係を検討。また、同日の調査では、従来知られていなかった儀鏡の存在を確認した。石井は、別動隊として神社周辺遺跡と露頭の踏査へ赴く。

２月25日（木）　午前中は、白濱神社の原宮司よりお話を頂く。また、白濱神社所蔵資料の出土状況などについて聴き取りを行った。市内にて昼食を喫した後は、再び資料調査に取り掛かる。並行して、石井と同日来援の中村は、神社所蔵の石棒を調査した後、周辺遺跡と露頭の踏査を行う。

２月26日（金）　朝、祭祀遺物の出土が知られる火達山を踏査。海岸沿いに位置しており、大方は砂地となっている。同日も、神社所蔵資料の調査を続行。土師質土器の分類を確定し、資料調査を完了する。石井は、河津町まで足を延ばして遺跡・露頭踏査。終日雨模様。

２月27日（土）　かつて武山閣（下田開港記念館）の置かれていた了仙寺へ赴き、了仙寺宝物館を見る。但し武山閣旧蔵資料の一部は、下田開国博物館に移されているとも言う。下田市立図書館にて地方史関係資料を収集後、帰途石棒出土遺跡などの踏査を実施。三島まで北上して遅い昼食を喫し、一路東京へ向かう。19時、大学着。機材を収納して解散。　（深澤・石井）



第４章　調査成果

白濱神社関係資料については、その多くが社誌『伊古奈比咩命神社』に収録されているほか（大場1943）、足立鍬太郎氏の『南豆神祇誌』などにも一部の紹介が見られる（足立1928）。それらの記録によれば、奥書に「壬生御館末流宮司原図書長男原藤蔵與之」とある『三嶋大明神縁起（白濱大明神縁起・三宅記）』白浜本や、佐野北条氏忠朱印状（下田市指定文化財）をはじめとする各種文書・棟札類のほか、三嶋大明神の本地仏である薬師如来座像１躯（下田市指定文化財）・薬師如来立像１躯、伊古奈比咩命の本地仏と推定される聖観音像１躯など、貴重な文化財が多数残されていることがわかる。

これらの有形文化財以外では、境内地の祭祀遺跡である火達山遺跡が、下田市指定史跡に登録されている。また、戦後激減した伊豆の三番叟は、下田市でも10月30日朝に白濱神社拝殿で舞われるものを残すのみとなっており、下田市指定無形民俗文化財とされた。なお、境内には、国指定天然記念物のアオギリ自生地や、静岡県指定天然記念物のビャクシン樹林が広がっている。ちなみに、アオギリは、温暖な地に育つものであり、日本列島では分布の北限に当たるという。

以下では、これらの社史資料のうち、原田遺跡出土石棒１点、小長田神明遺跡出土円筒形埴輪１点、火達山遺跡出土土師器８点・須恵器17点・土師質土器54点、白濱神社境内遺跡古宮山地区出土御正躰１面（下田市指定文化財）・和鏡３面（下田市指定文化財）・儀鏡１面、白濱神社境内遺跡白濱経塚出土墨書礫３点、出土地不明黒曜石製鏃１点・黒曜石18点・土師器15点・須恵器５点・土師質土器４点・かわらけ２点・中世陶器１点・近世陶器７点・自然石20点について調査所見を報告したい。なお、有形文化財（工芸）としては、大久保長安が慶長12（1607）年に奉納した鰐口１点（静岡県指定文化財）も蔵されており、「奉掛豆州賀茂郡白濱伊古奈比咩命大明神御寶前」の刻銘が認められるが、由来の明らかな伝世資料であるため、ここで改めて再資料化を行うことはしなかった。

（石井）

第１節　原田遺跡出土資料

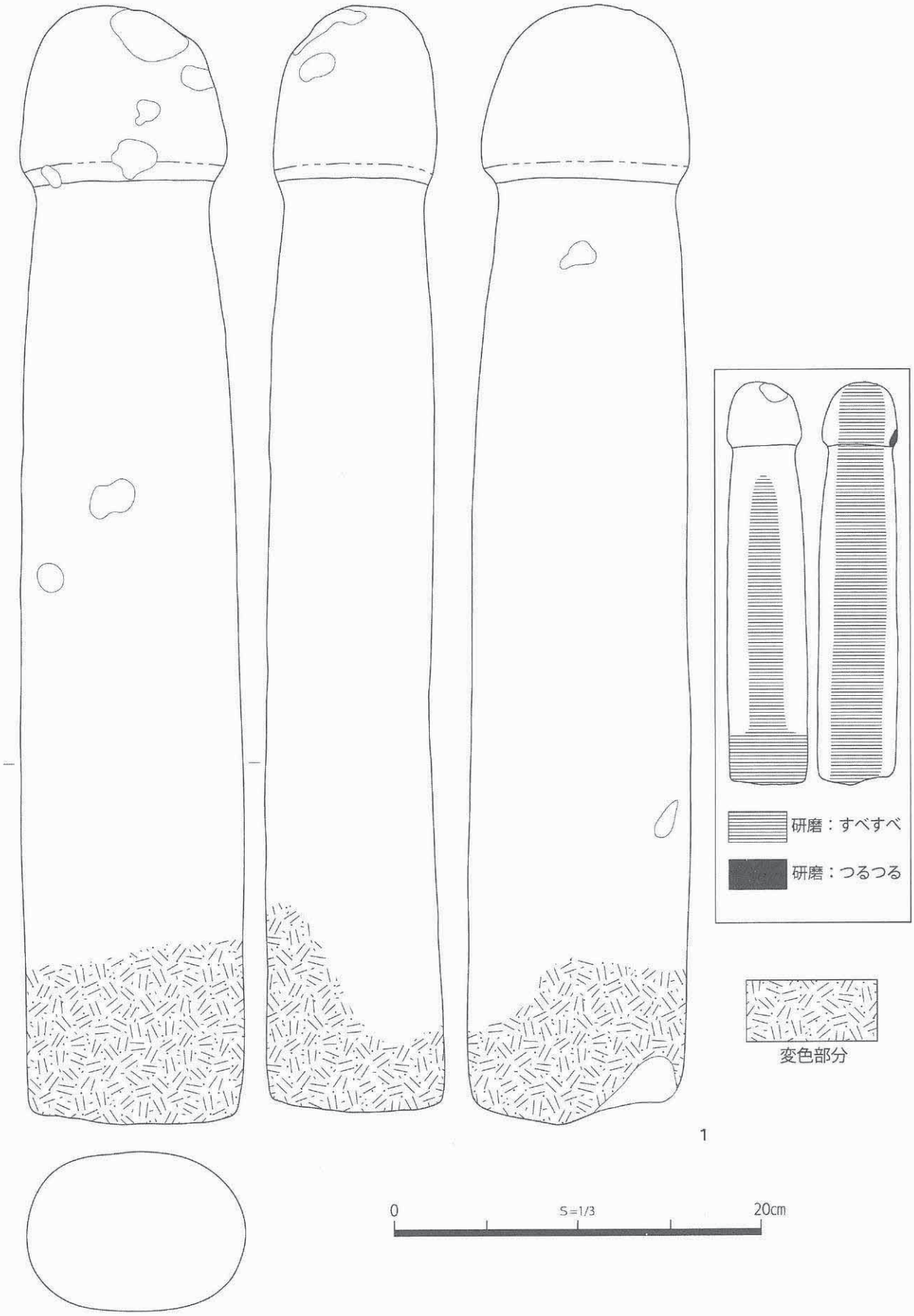
№18　原田遺跡の概要（第１図－18）

当遺跡は、白濱神社から250ｍほど東の沢筋近くに所在する。旧『静岡縣史』によれば、縄文時代の石棒が発見されているとのことであり（足立編1930）、『静岡県文化財地図』では平安時代の鉄滓散布地でもあるというが（静岡県教育委員会文化課1988）、その詳細はわかっていない。原田遺跡発見の石棒については、旧県史に「神社所藏の大石棒は、字原田なる神職原家の墓地で發見されたもので、花崗岩製長六〇糎餘・斷面は楕円形をなしたるものである。」と記録されている。資料の現状については後述するが、原宮司の御好意によって現存資料を計測させて頂いたところ、概ね旧県史所載の記録と合致することが確認できた。

石棒（第２図、図版２）

有頭大形石棒の略完形品であり、下端部の一部が欠損する。花崗岩製と思われ、長さ58.1㎝、断面図の長径10.8㎝、短径8.6㎝である。頭部、及び胴部に径数㎝前後の剥落が複数見られるが、敲打痕ではなく、自然に剥落したものらしい。また、頭部に広範囲の剥落が見られるが、自然に剥落したものか否かの判別は難しい。全体的に丁寧な研磨整形がなされている。頭部側縁の一部にとりわけ顕著な摩耗が見られ、手触りはつるつるしている。また、胴部表裏にも広範囲に顕著な摩耗が見られ、手触りはすべすべしている。全体は暗灰色を呈するが、下端部には被熱によるものと思われる暗褐色の変色が観察される。変色は煤の付着による可能性も考えられる。おそらく、縄文時代中期～後期の所産であろう。

（石井・中村）



第２図　原田遺跡出土資料

第２節　小長田神明遺跡出土資料

№15　小長田神明遺跡の概要（第１図－15）

当遺跡は、白濱神社々頭から宮前川に沿って国道135号線を北へ300mほど遡り、そこから西岸へ約100m進んだ先の神明に所在する。高根山東麓に当たる現地は、白浜中学校が置かれていた場所であり、今も病院等が設けられているため旧来の面影はないが、かつては白浜海岸や伊豆諸島を望む景勝地であった。また、そもそも神明は、白濱神社の旧社地と伝えられ、周辺の神楽・森・御手洗などと同じく、数多くの末社が営まれていたという。これら境外末社の一部は、白浜の社家・社人らが奉斎してきた邸内社を本社境内社として遷祀した時期の前後、或いは更に複数境内社を一社に統合した大正10（1921）年前後の何れかに、産山の十二明神社へと合祀されたものとみられるが、周辺の畑を神楽畑と呼んで肥料を撒くことさえ憚る風習は、暫く後まで残っていたらしい。

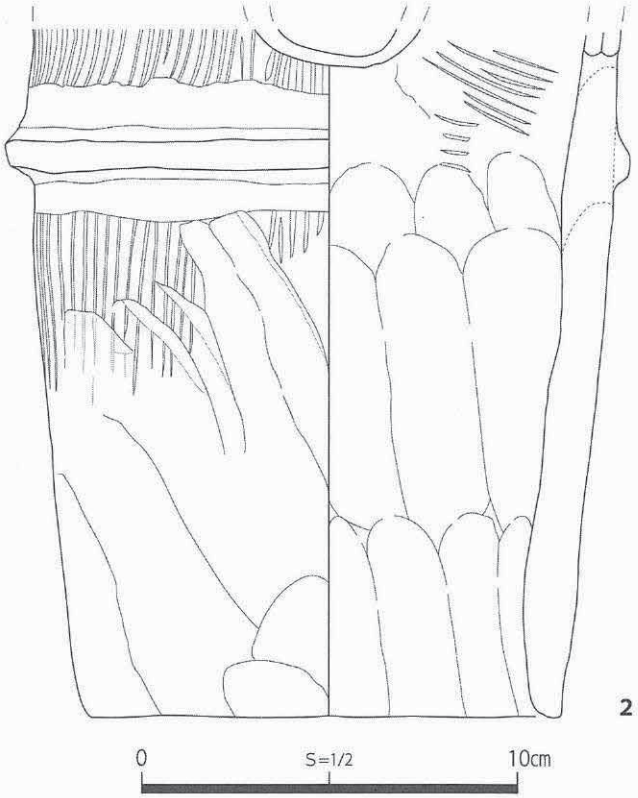
このような神明の地では、土師器や須恵器の破片を採集することができ（大場1943）、白浜中学校を建設した際にも多量の土器類が出土したとのことであるが（原宮司談）、資料の行方は不明である。但し、白濱神社には、この神明から出土したという埴輪が伝わっている。神明出土の埴輪については、『南豆神祇誌』に「是は白濱神社即ち伊古奈比咩命神社の古址と稱する場所に往時より一大樟ありしを、四十餘年前（明治20年前後か：引用者註）伐採せし時、勾玉金環等の出でしことあれば、埴輪もそれと同時に出しならんといふ。」（足立1928）とある。また、旧『静岡縣史』は、「これは今より四十餘年前のことで、當時發掘したといふ進士猪吉氏に當時の話を聞くと、現在田圃となつてゐる處で、埴輪圓筒が二三本出たのを、引上げようとすると途中で折れた。完全なものは二本位であったらう。尚ほ破片は畑地のまはりから出たとのことである。」という（足立編1930）。白濱神社所蔵埴輪は、この時点で発見された資料の一部と思われ、後に下田高校で保管していた破片と接合した（原宮司談）。

なお、当遺跡について『静岡県文化財地図』は小長田遺跡（№15）、『下田市史』は神明遺跡と称しているため（静岡県教育委員会文化課1988、下田市史編纂委員会2010）、ここでは便宜的に小長田神明遺跡と呼んでおく。

円筒形埴輪（第３図－２、図版２）

円筒形埴輪の基部残欠であり、２段目のスカシ下端までが残る。残存高約18.00cm、第１段高約14.50cm、器厚約0.80cm～1.40cm、底径約12.50cmである。本体は、底面から見て「の」字状に巻いた粘土を基礎として積み上げ、外面にタテハケを施す。内面調整は、縦位のナデによるが、２段目に若干のハケメが認められる。崩れた台形のタガは、幅約1.50cm、高さ約0.50cmで、ヨコナデによって圧着された。また、円形スカシを穿っているが、切り取りの回転方向はわからない。底部調整は、本体を倒立して外面に工具を強く押圧することで、底部の歪みを修正したものと見られる。胎土に微細な白色粒子を含み、器面は赤褐色を呈す。黒班は無い。

成形・整形の特徴から判断して、６世紀前半の所産とするのが妥当であろう。鈴木敏則氏は、底部調整に畿内との共通性が見出されることから、畿内、もしくは伊勢方面からの搬入品と評価している（鈴木1995）。（深澤）



第３図　小長田神明遺跡出土資料

第３節　火達山遺跡出土資料

№19　火達山遺跡の概要（第１図－19、図版７）

火達山は、白濱神社の北側に隣接する高さ20mほどの海岸砂丘である。白濱神社では、旧暦９月20日・21日に例大祭を行っており、その前夜に火達山の頂で火を焚いて、伊豆諸島の神々にマツリのはじまりを告げてきた。現在の祭場は、境内南側の白浜海岸に移されているが、かつて火達祭が行われていた火達山一帯、すなわち下田市指定史跡の火達山遺跡（№19）では、縄文時代の土器や、オオツタノハ貝で作られた貝輪のほか、かかる旧儀に関連する祭器と思われる考古資料が見つかっている（静岡県教育委員会文化課1988、下田市史編纂委員会2010）。

大場磐雄氏によれば、「（火達山は：引用者註）古來本社と關係深い地とされ、舊儀に毎年九月二十日の夜焚火を行ひ、諸島と火合を行った所である。今同所の地下から多數の祭器類が發見せられる。一例を示すと、大部分は赤色素燒粗製の盌又は高坏類で、中には糸切の痕の歴然たるものや、篦跡の存するもの等があって、製作手法の内容を物語ってゐるのである。又これと共に若干ではあるが大形須惠器の破片も存在して居り、共にその製作年代は平安末期より鎌倉時代頃と推定せられるのである。」という（大場1943）。これらの遺物が出土した地点については、残念ながら詳細な情報が得られていないものの、足立鍬太郎氏が「（三島通良：引用者註）博士は白濱神社東方の旧社地から土器の出るやうにいふけれども、そは社域の北に続いた火達山下のことであらう。此處は往古年々幾度かの祭典に用ひた土器を棄却した場所とおぼしく、約三尺を掘れば無数に破片を得られる。中には糸切製のものもあるによつて鎌倉時代に下るのもあらう。又大正七年二月十五日同地で完形の古鉾一枚を拾ひ、今年二月七日また同質の鉄片を得た。」と述べている（足立1920）。また、現宮司の原嘉孝氏より伺った所によれば、火達山西方の宮前川付近で土器類が出土した旨、先々代宮司から伝え聞いたとのことである。

このような発言を総合的に捉えると、白濱神社蔵の火達山遺跡出土遺物は、足立論文が発表された大正９(1920)年以前に、火達山西麓で採集された資料を主体とするものと捉えるのが順当であろう。但し、須恵器については、旧『靜岡縣史』も「（白濱神社：引用者註）改築の際、社地から須惠器の破片を多く發見した。その破片は前述の小長田神明から掘出した埴輪破片と共に同社に保管してある。」と述べるに止まっており、その出土地点が境内の何処に位置するか明示していない。従って、白濱神社保管の須恵器類が、全て火達山遺跡から出土したものか、次節で触れる白濱神社境内古宮山遺跡の出土資料を含むのか、俄かに判断できないのである。そこで当項では、大場氏が編んだ『伊古奈比咩命神社』において、火達山遺跡出土遺物として図版が示された遺物に加え（大場1943、図版１）、それらと明らかに同種・同質と認めて差し支えない資料について報告することとしたい。

（深澤）

土師器（第４図－３～７、図版３）

８点の内、甕の口縁部残片３点（第４図－３～５）、胴部残片２点（第４図－６・７）を図示した。３・５は、『伊古奈比咩命神社』所収資料ｉ・ｊである（図版１、大場1943）。口縁部は、3.50cm～4.00cm程度の立ち上がりを見せ、ヨコナデ調整が施されている。端部の内面には、粘土紐を付加した肥厚箇所が認められる。胴部は、内外面ともハケメが施されており、0.85cm～1.10cmほどの器厚を持つ。器面は暗赤褐色を呈し、胎土に微細な砂粒と白色粒子を多く含む。４・６・７と、図示しなかった胴部残片２点は、いずれも0.80cmほどの器厚であり、外面の一部が黒く変色している。これは、煮沸の際に付着したススであろう。

これらの土師器残片は、同一個体ではなく、全体的な形状も不明だが、所謂「駿東型」甕と見て大過あるまい（瀬川1981・北川1988ほか）。駿東型甕は、６世紀後半から８世紀にかけて、伊豆半島北部を中心に分布する球胴の甕であり、口縁部内面の肥厚を特徴とする。また、胴部外面にミガキを施した事例が７世紀前半に現れ、その後半になると主体を占めるようになった。当資料は、残存部位が少ないため、必ずしも決定的な判断材料にはならないものの、胴部にミガキが認められないことから、７世紀前半以前のものと位置付けておきたい。

須恵器（第４図－８～10、図版３）

17点の内、甕の胴部残片３点（第４図－８～10）を図示した。８～10は、『伊古奈比咩命神社』所収資料ｄ～

ｆである（図版１、大場1943）。そのうち８・９は、器厚が0.80cm～0.90cm程度であり、外面に幅１cmあたり４本ほどの条線を持つタタキ目が見られる。内面側の当て具は、拳大の礫、もしくは陶製無文のものを用いたらしいが、多くはナデ消されており顕著な痕跡を残していない。また、内面の一部には、幅１cmあたり３本程度の条線を持つ工具で掻いた痕跡が認められるものの、条線単位の重なりは粗であり、その調整効果は不明である。焼成は良好で、内外面ともに明灰色を呈す。８・９に類似する資料は、他に12点認められるが、内面の条痕を持たない資料もある。10は、器厚が0.80cm程度であり、外面に幅１cmあたり２本ほどの粗い条線を持つタタキ目が見られる。内面には、拳大の礫、もしくは陶製無文の当て具を押圧した痕跡が認められる。焼成は甘く、内外面ともに灰黒色を呈す。風合いからすれば瓦器と言っても良く、類似する残片が他に２点存在する。

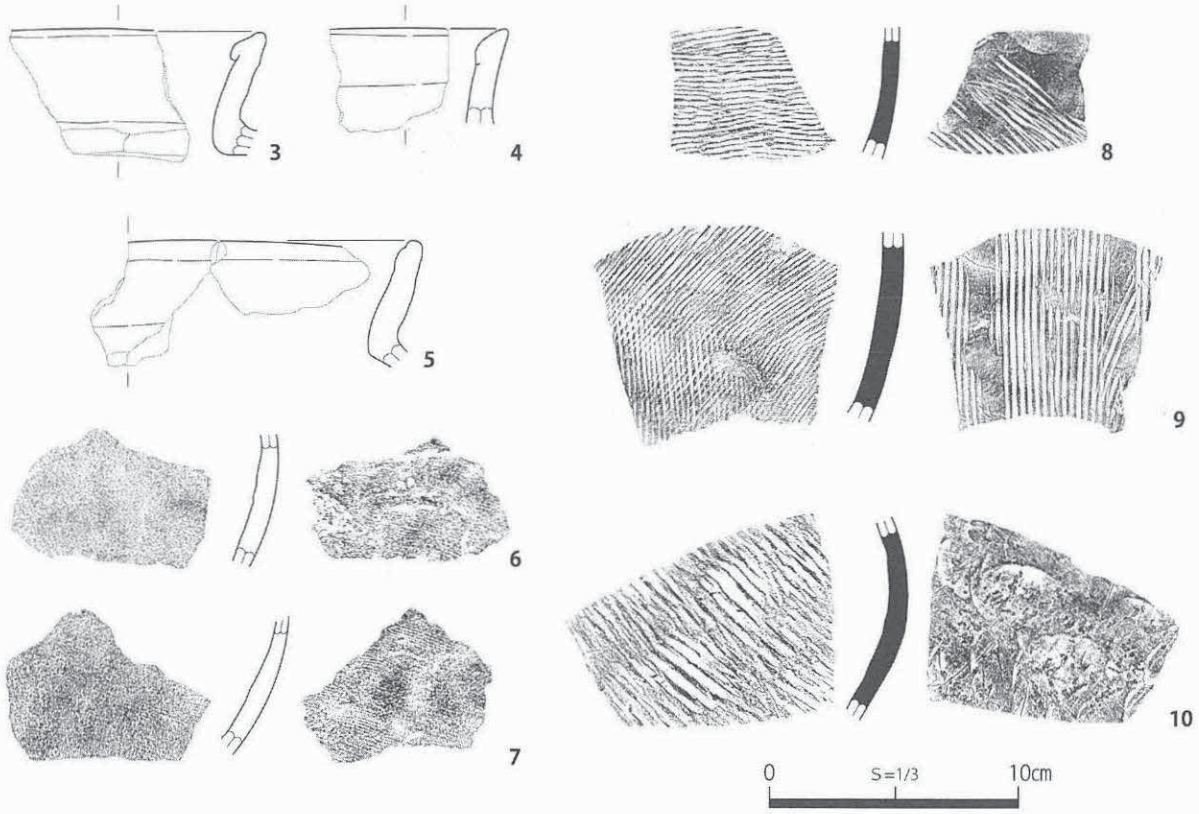
これらの須恵器残片は、形態の復元が不可能であり、時期的な位置付けは勿論、産地の同定も困難である。但し、いずれも叩き技法による須恵質の土器であることは疑いなく、兵庫県の東播系諸窯や、石川県の珠洲窯などとの共通性が窺われよう。年代については、暫定的に12世紀から13世紀頃のものと見ておきたい。

土師質土器（第５図－11～35、図版３）

54点の内、完形、もしくは充分な復元が可能な25点を図示した。15・19・25・は、『伊古奈比咩命神社』所収資料ａ～ｃである（図版１、大場1943）。土師質土器は、いずれもロクロ成形によるものであり、小皿（Ⅰ類：14点）・高台付小皿（Ⅱ類：４点）・柱状高台付小皿（Ⅲ類：９点）・脚付小皿（Ⅳ類：27点）に３大別できる。

Ⅰ類の小皿（11～14）は、器高約３cm、底部径約４cm、口縁部径約８cm程度の大きさに収まり、底部を形成する粘土円板の厚さは約１cmである。いずれも、底部に回転糸切り痕が見られる。底部から口縁部まで残存している資料は殆ど無いが、11の体部は外彎気味に開く。

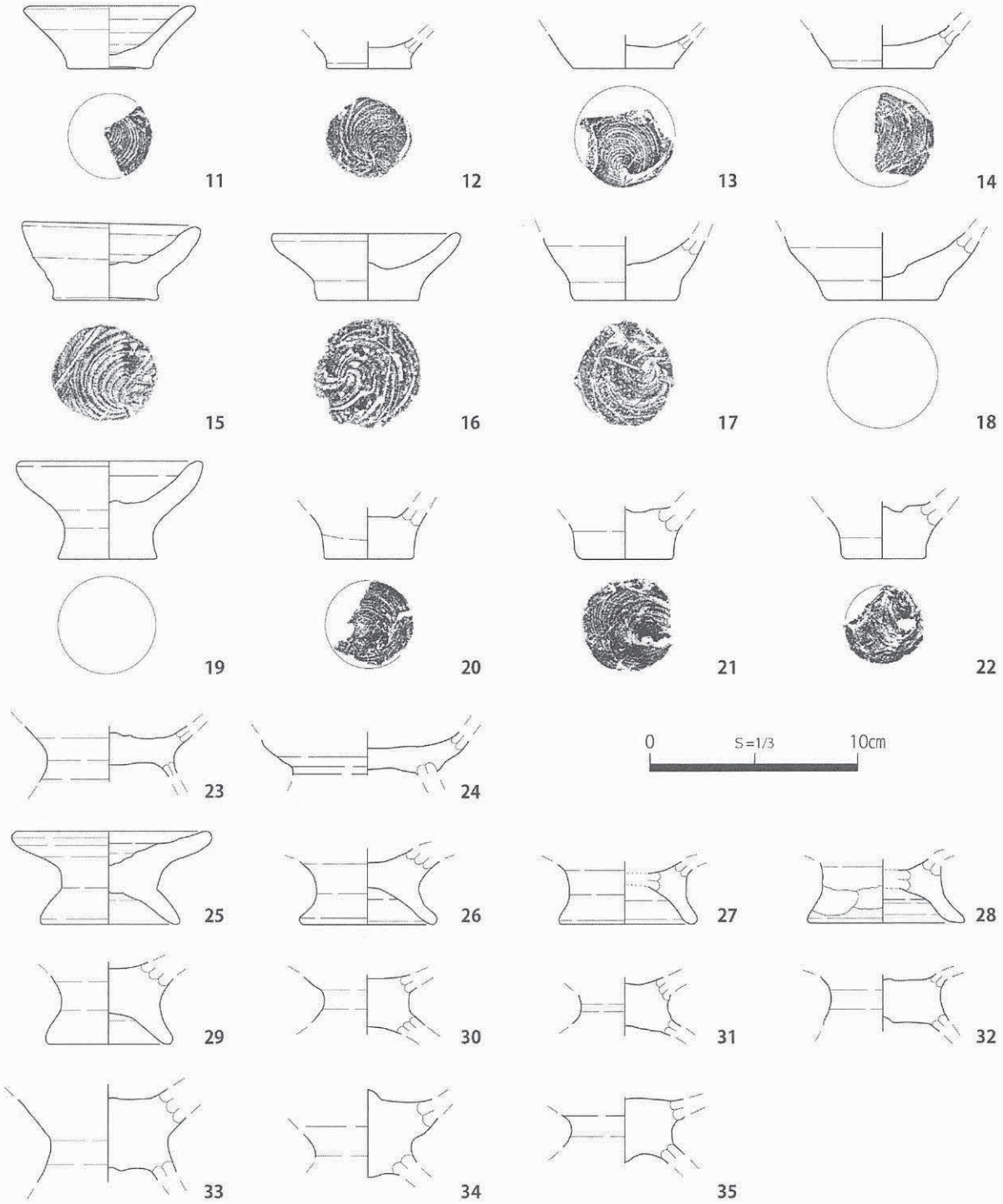
Ⅱ類の高台付小皿（15～18）は、器高約３cm、底部径約５cm、口縁部径約８cm程度の大きさに収まり、器高と口縁部径の比率は〔１：2.5以上〕である。このように、プロポーションは小皿と大きく変わらないものの、底部を形成する粘土円板の厚さが２cm前後あり、その点では柱状高台付小皿に近い。遺存状況が良好な資料の底面には、回転糸切り痕が見られる。体部は内彎気味に開く。



第４図　火達山遺跡出土資料（１）

Ⅲ類の柱状高台付小皿は（19～22）、器高約５㎝、底部径約４㎝～５㎝、口縁部径約８㎝程度の大きさに収まり、器高と口縁部径の比率は〔１：２以下〕である。高さ1.5㎝程度の高台を特徴とし、底部を形成する粘土円板の厚さが２㎝～３㎝ほどある。20～22の残存部位は高台のみであり、粘土円板の高さもⅡ類の高台付小皿と大きく変わらない資料があるが、その形態的特徴から本類に属するものとした。遺存状況が良好な資料の底面には、回転糸切り痕が見られる。底部から口縁部まで残存している資料は殆ど無いが、19の体部は内彎気味に開く。

Ⅳ類の脚付小皿は（23～35）、いずれも小皿に脚部を付加する点で共通する。これを更に細分すると、底部径が７㎝ほどある小皿の底部縁辺から脚部を立ち上げたもの（Ⅳ－１類：23・24）、Ⅰ類のような底部径の小さい小皿に脚部を付加したもの（Ⅳ－２類：18～35）、小皿の底部を形成する粘土円板の厚さが２㎝前後あるもの（Ⅳ



第５図　火達山遺跡出土資料（２）

－３類：29～32)、小皿の底部を形成する粘土円板の厚さが３㎝前後あるもの（Ⅳ－４類：33～35）の４種類が認められる。このうち、Ⅳ－３類とⅣ－４類については、別に成形した小皿と脚部を接合した可能性を否定できないものの、多くは高台付小皿（Ⅱ類）や柱状高台付小皿（Ⅲ類）に脚部を付加したものと見ておきたい。残存状態の良好な資料は殆ど無いが、25の体部や、26～29の脚部は外彎気味に開く。

これらの土師器質土器は、胎土に微細な白色粒子・黒色粒子を含み、一部資料には赤色粒子も見られる。色調は、赤褐色から黄褐色まで幅があるが、総じて有意な差異は認められなかった。また、当土器類の年代的位置付けについては、伊豆南部には類似資料の良好な出土事例が無いため、地域的な事情を吟味する術を持たない。しかし、韮山地域を主な対象とする池谷初恵氏の編年案を参照すると（池谷2008)、ここで見た土器類は、12世紀後半以前のものと捉えるのが妥当であろう。周辺事例や一般的年代観に照らしても（佐藤1986・1987、伊藤2000、八峠2001、降矢・佐々木・山下2001ほか)、概ね11世紀から12世紀にかけての供膳具と見て誤り無いものと思われる。

（内川・深澤・新原）

第４節　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料

№20　白濱神社境内遺跡　古宮山地区の概要（第１図－20、図版７）

白濱神社拝殿の背後に控える丘には、三嶋神と主祭神である伊古奈比咩命、そして若宮・剣・見目の所謂「五社大明神」を祀る本殿がある。文化９（1812）年に平田篤胤が著した『白濱神社略縁起』によれば、「(文化９年：引用者註）九月中に、五社の御正躰の御鏡、御社の奥山に是有るよし、神託によりて尋ね入りし處、果して老松の本に霊芝を生じて雨露を防ぎ、其の下より神鏡五面を掘出したり。是は昔年兵乱の節亡失せむことを恐れて、社家の隠し埋置たると見えたり。その一面の銘に、若宮御正躰嘉祿元年十二月日とこれあり。餘の四面は文字消えて詳ならず。」とあり、今に伝わる若宮御正躰と和鏡が、出土資料であった事実が知られる。但し、『伊古奈比咩命神社』にも報告のある「神鏡五面」のうち、１面（柳樹双雀鏡）は失われて現存せず（大場1943)、詳細は同書や『伊豆下田』の記録に頼るほかない（長島・日野1969)。ちなみに、神社所蔵の鏡類には、『伊古奈比咩命神社』に報告されていない儀鏡１面が伴っている。

なお、この白濱神社境内遺跡（№20）には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が散布しているというが（静岡県教育委員会文化課1988、下田市史編纂委員会2010)、それらの出土地点や資料自体の詳細は明らかでない。従って、鏡類の出土地点については、三嶋大社の古宮であることから白濱神社を「古宮山大明神」とも称した事実にちなみ、本殿周辺のみを限って「古宮山地区」と仮称しておきたい。

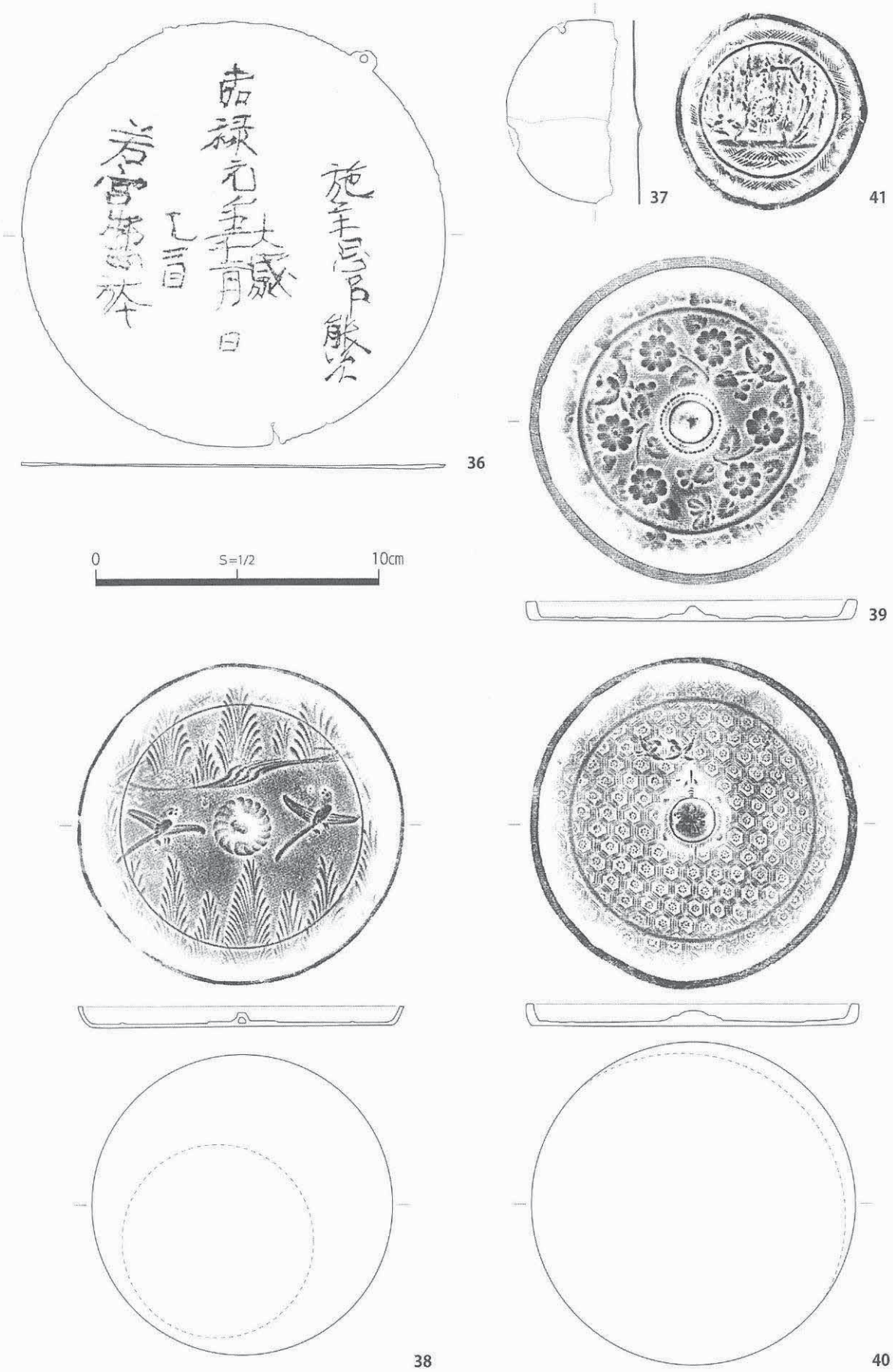
（深澤）

御正躰（第６図－36、図版４）

36は、三嶋大明神の随神、「若宮」の御正躰とされる。厚さ約0.10㎝の銅板を、直径約14.90㎝の円形に切り取ったもので、重量は100.00ｇであった。６㎝ほどの間隔を置いて左右に造作された吊手のうち、残存する右側の吊手は、幅約1.00㎝、高さ約0.50㎝の半円形を呈し、中心に径約0.25㎝の円孔を持つ。恐らく、左側の吊手も同様な作りであったに違いない。表面には、右から「施主忌部能次／嘉祿元年／大歳／十二月　日／己酉／若宮御正躰」との線刻が施されているが、左右の吊手を水平にして懸垂すると、文字が右下へ斜めに傾いてしまう。なお、裏面の一部には、鍍金の痕跡が残っており、本来は全面が金色であった可能性が高い。線刻に見る通り、当御正躰は、嘉祿元（1225）年12月に、若宮御正躰として忌部能次が奉納したものと考えて良かろう。

儀鏡（第６図－37、図版５）

37は、儀鏡の残片である。厚さ約0.07㎝の青銅板を、直径約6.50㎝の円形に切り取ったもので、重量は約8.00ｇであった。全体の６割程度が残存しており、縁辺から0.10㎝ほど内側には、径約0.20㎝の円孔も見られる。原状は不明だが、このような懸垂用の小孔が、欠失部にも存在した可能性は否定できない。また、鏡面の中程には、一条の折れ線が認められる。その成因は詳らかでないものの、断面形態から判断すると、一旦二つ折りにされた儀鏡を、もう一度開いた時に残された痕跡と考えることもできよう。これは、『伊古奈比咩命神社』に報告が見



第６図　白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料

られない資料であるが（大場1943）、他の鏡類と共に「白濱大明神　御神鏡」と墨書された木箱に納められていたことから、当遺跡出土資料と一括して紹介することとした。

和鏡（第６図－38～41、図版５）

38は、水草双鳥鏡である。直径約11.10cm、器厚約0.15cm、縁高約0.70cmの青銅鏡であり、重量は124.00gであった。鏡縁は、外傾式細縁である。鏡背には、捩菊中隆鈕を中心として、細線の単圏が巡る。また、流水の中に茂る水草が上下に描かれ、左右に二羽の鳥が羽ばたいている。12世紀前半から中頃にかけての所産であろう。なお、鏡面には、直径6.5cm～6.9cm程度の丸い染みがある。これは、37の儀鏡、もしくは亡失した41の柳樹双雀鏡が圧着していた痕跡と思われる。

39は、山吹鳥蝶鏡である。直径約11.60cm、器厚約0.15cm、縁高約0.70cmの青銅鏡であり、重量は210.00gであった。鏡縁は、直角式中縁である。鏡背には、花蕊中隆鈕を中心として、中線の単圏が巡る。また、花開いた山吹の小枝と、その間隙を縫って舞う双雀や蝶が描かれている。13世紀前半の所産であろう。

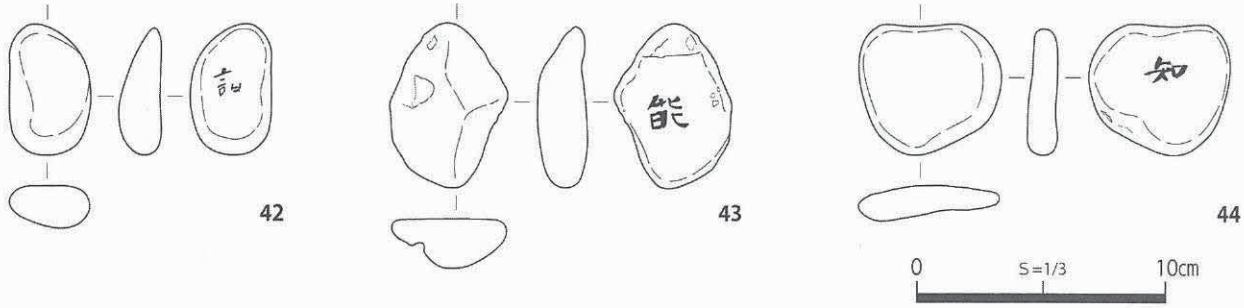
40は、亀甲地文双雀鏡である。直径約11.60cm、器厚約0.20cm、縁高約0.70cmの青銅鏡であり、重量は180.00gであった。鏡縁は、直角式中縁である。鏡背には、亀鈕を中心として、細線の単圏が巡る。また、全面に亀甲地文が描かれ、鈕座である亀の頭部から見て左上に双雀を配する。13世紀中頃から後半にかけての所産であろう。なお、鏡面には、当鏡と同等の丸い染みが、互いに0.60cmほどズレた状態で認められた。これは、39の山吹鳥蝶鏡が圧着していた痕跡と思われる。『伊古奈比咩命神社』は、この亀甲地文双雀鏡と「表を合せて埋没されてゐた」鏡を水草双鳥鏡としているが（大場1943）、正しくは39の山吹鳥蝶鏡としなければならない。

参考までに、亡失した柳樹双雀鏡を41に示しておいたが、これは直径約6.80cm、縁高約0.50cmの青銅鏡と報告されており（大場1943、長島・日野1969）、和鏡としては小型の部類に属する。鏡縁は、直角式中縁である。鏡背には、捩菊中隆鈕を中心として、中線の単圏が巡る。また、内区の下半に土坡（土手）と流水が描かれ、右側の柳樹から枝が全面に垂れている。加えて、左側下手に双雀を配する。外区には、斜格子状の文様が全周する。13世紀前半の所産であろう。（内川）

第５節　白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料

№20　白濱神社境内遺跡　白濱経塚の概要（第１図－20、図版７）

白濱神社の拝殿左手から墨書礫が出土した事実については、既に大場氏が社誌『伊古奈比咩命神社』にて報告しており、墨書礫２点の図版も同書で紹介されている（図版１－ｍ・ｎ、大場1943）。現在、白濱神社には多数の自然礫が保管されているが、明らかな文字や墨痕が認められるものは、そのうち３点のみであった。なお、これらの経石に伴って出土した銭貨「皇宋通寶」１点・「大観通寶」１点は（大場1943）、白濱神社境内遺跡古宮山地区出土の柳樹双雀鏡と共に失われて現存しない（原宮司談）。経塚の跡には、新たに聖徳太子社と称する小祠が営まれており、その周辺に墨書礫と石質を同じくする円礫が多数散布している。経塚本体の遺存状況は詳らかでないが、白濱神社境内遺跡（№20）のうち、当地点について「白濱経塚」と呼んでも差し支えなかろう。



第７図　白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料

墨書礫（第７図、図版６）

42は、長径約5.30cm、短径約3.20cm、厚さ1.80cm、重さ39.50gの片面が平たい円礫であり、赤褐色を呈する。平坦な面に、「諸」、もしくは「詣」に類する墨書が見られる。43は、長径約6.60cm、短径約4.60cm、厚さ2.00cm、重さ62.50gの片面が平たい円礫円礫であり、黄褐色を呈する。礫面には多少の孔が認められるが、人為的なものではない。平坦な面に、「能」、もしくは「熊」に類する墨書が見られる。44は、長径約5.70cm、短径約5.20cm、厚さ1.40cm、重さ53.00gの平たい円礫であり、黄褐色を呈する。石質は43に近い。若干凸状の面に、「知」と思われる墨書が見られる。

いずれの礫も、堆積岩系の石材が摩耗したものと見られるが、神社付近の海岸や河畔に散布するものではないらしい（原宮司談）。産地については、なお検討の余地があるが、礫石経として用いるため、特別に選択して採集されたものであろう。拝殿左手に積まれた同種の礫も、長い時間の経過で墨書を失った礫石経かもしれない。なお、礫を左手で保持してみると、文字を正位にした場合が最も掌中での納まりが良い。これらの文字は、闇雲に書かれたものではないのである。帰属時期は不明だが、礫石経塚を直ちに近世のものと考えるのは些か単純に過ぎる。ここでは、広く中世から近世のものと見ておきたい。

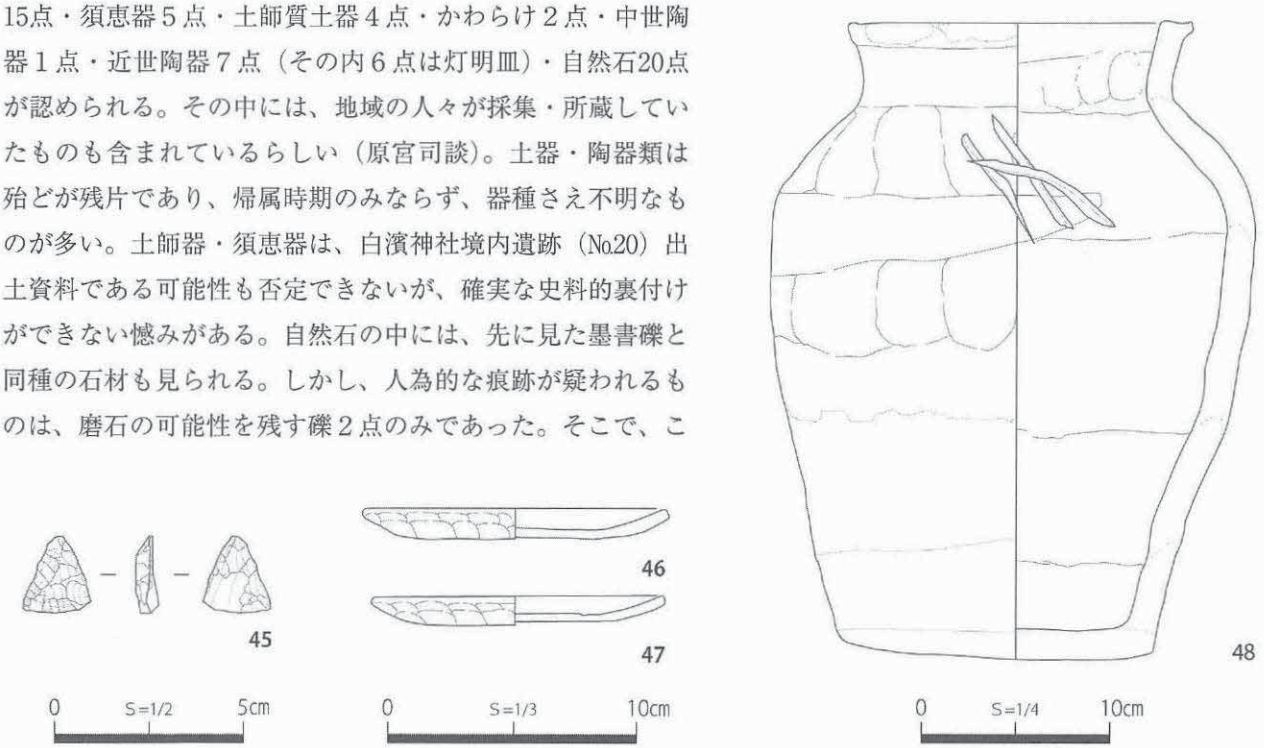
銭貨（図版１）

なお、共伴した「皇宋通寶」・「大観通寶」は失われて現存しないものの、いずれも北宋銭であった。北宋仁宗の宝元元（1038）年に初鋳された「皇宋通寶」は、真書・篆書の２種類があったが、『伊古奈比咩命神社』所収の写真図版を見る限り（図版１－ｋ、大場1943）、当経塚出土資料は真書のものである可能性が高い。また、「大観通寶」は、北宋徽宗の大観元（1107）年に初鋳されたものである。（深澤）

第６節　出土地不明資料

出土地不明資料の概要

出土地不明資料は、黒曜石製鏃１点・黒曜石18点・土師器15点・須恵器５点・土師質土器４点・かわらけ２点・中世陶器１点・近世陶器７点（その内６点は灯明皿）・自然石20点が認められる。その中には、地域の人々が採集・所蔵していたものも含まれているらしい（原宮司談）。土器・陶器類は殆どが残片であり、帰属時期のみならず、器種さえ不明なものが多い。土師器・須恵器は、白濱神社境内遺跡（№20）出土資料である可能性も否定できないが、確実な史料的裏付けができない憾みがある。自然石の中には、先に見た墨書礫と同種の石材も見られる。しかし、人為的な痕跡が疑われるものは、磨石の可能性を残す礫２点のみであった。そこで、こ



第８図　出土地不明資料

こでは、計測可能であった黒曜石製鏃１点、かわらけ２点、中世陶器（常滑壺）１点について報告することとしたい。

黒曜石製鏃（第８図－45、図版６）

45は、全長1.70㎝、幅1.70㎝、器厚0.50㎝の無茎石鏃である。石材は黒曜石であり、剥片類を含む同質の石材18点と共に神社が保管している。産地同定は試みていないが、いずれも神津島、もしくは箱根周辺から搬入された石材と思われる。縄文時代の所産であろう。

かわらけ（第８図－46・47、図版６）

46は、器高約1.20㎝、底部径約8.00㎝、口縁部径約11.80㎝のかわらけ小皿である。型抜き後に、手づくね調整したものと思われ、内面にヨコナデ痕、外面に指頭圧痕を残す。器面は明褐色を呈し、胎土に赤色粒子を含む。47は、器高約1.15㎝、底部径約7.50㎝、口縁部径約11.50㎝のかわらけ小皿である。成整形は46と大方同様であるが、内面に一条の沈線状圧痕が巡る。器面は暗褐色を呈し、胎土に赤色・白色粒子を含む。

これら、手づくね成形のかわらけについては、伊豆地域の様相が充分明らかになっていない現在、年代的な位置付けを試みることも容易ではない。しかし、少なくとも伊豆北部の韮山地域では、12世紀末～13世紀中頃に見られた後、16世紀に搬入品として再び現れるまで、手づくね成形のかわらけを用いた形跡が無い（池谷2008）。

常滑壺（第８図－48、図版６）

48は、器高約28.10㎝、底部径約13.60㎝、口縁部径約11.80㎝、胴部最大幅約21.30㎝、器厚約1.10㎝～1.30㎝の壺である。口縁部に若干の欠損が見られるものの、ほぼ完形と言って良い。底部を造作した後、粘土帯を積み上げて成形したようであり、胴部から頸部にかけて粘土帯の接合痕が残る。外面上半はヘラケズリによって整形されており、口縁部は指頭で成形した後、ヨコナデ調整が施されている。また、肩部に箆記号様の条痕が３本見られる。器面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。産地は常滑で、16世紀後半の所産であろう。

（内川・加藤）

第５章　総括

成果の概要

当センターの事業は、本学の学術資産を活用しつつ、「伝統文化に見るモノと心」について追及するものであるが、ともすれば内向的な研究に陥る危うさも孕んでいる。しかし、過去の調査事例について再検証と再資料化を図る試みは、日に新たに出土資料が増加しつつある今日にあっても、なおその必要性を失っていない。

今回の調査では、大場磐雄氏が編んだ『伊古奈比咩命神社』所収資料を中心に（大場1943）、白濱神社所蔵の考古資料を再記録した。個別資料の位置付けについては未だ吟味に不十分な点もあろうが、これまで個別断片的な情報しか得られていなかった遺物群の全体像について、具体的な様相が明らかになったことは特筆できる。とりわけ、70年近く原典報告とされてきた『伊古奈比咩命神社』の記載と実物資料を実地に対照することで、個々の資料が出土した遺跡の確定や、今日的な年代観からの再検討が可能になった点は大きい。

なお、整理の過程で、本学所蔵の大場磐雄博士資料に収められた白濱神社関連資料を再確認したところ（國學院大學学術フロンティア実行委員会編2004、國學院大學伝統文化リサーチセンター編2011）、『伊古奈比咩命神社』の稿本に挟まった写真図版の版下が発見された。特に、「第七圖 火達山発見祭器類・境内発見經石及古錢」の版下（刊本では第八圖）には、14点の資料を写した鮮明な紙焼写真が貼り込まれており、図版１に示したｇ・ｈの土器と、失われたｋ・ｌの銭貨以外については、実物資料と同定することができたのである。

以下では、既述の成果について若干の補足を加え、本調査に係る一先ずの総括としておきたい。

先史時代の信仰遺物

かねてより、伊豆地域は静岡県下でも石棒が多く出土していることが知られており、縄文時代中期～後期の原田遺跡（№15）出土とされる完形大形石棒（第２図―１）もその一例に数えられる。古い発見であるため、出土状況については追求する術がないが、頭部や胴部に顕著な摩耗が認められるだけでなく、下端部には被熱痕と見られる変色が見られた。このような使用痕を残す事例は、全国各地に存在しており、石棒を摩擦する行為や、周囲で火を焚く行為があった可能性を示している。なお、本学では、当事業とは別に学術資料館が「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」事業の中で大形石棒研究プロジェクトを進めてきたので併せて参照されたい（大形石棒研究グループ編2011）。（石井）

白濱神社周辺の古墳時代像

さて、本書冒頭にも述べた通り、伊東市以南の伊豆東海岸沿いでは、未だ高塚古墳が確認されていない。小長田神明遺跡（№15）から出土した埴輪（第３図－２）の存在は、昭和初頭から広く紹介されていたものの、墳丘や埋葬施設の様相が不明であったため、一部の研究者を除いて殆ど注目されてこなかった（鈴木1995）。しかし、明治20年頃に、勾玉や金環が出土したという聞き書きも記録されている（足立1928）。ここでは、むしろ埴輪を伴う高塚古墳が存在した事実を積極的に認めることとしたい。そうすると、上ノ山洞穴墓（№31）の状況が不明ではあるものの、「小長田神明古墳」が６世紀前半に営まれた後、６世紀後半以降の了仙寺洞穴墓が続く、という状況を想定することが可能となる（宮本1984）。また、ほぼ併行する時期には、勾玉や石製模造品が出土した三穂ヶ崎遺跡（№27）が存在するが、今回の調査で同遺跡の発見者である原政一氏から直接伺ったところによれば、採集遺物の周辺に炭化物が認められたとのことである。このような祭祀に伴う火焚きの痕跡は、７世紀前半の夷子島遺跡にも認められており（佐藤・長田1937、桜井・杉山・神尾1962）、あるいは白濱神社の火達祭のように、伊豆諸島に向けた夜焚火が行われていた可能性もあろう。

このような首長墓や祭祀遺跡の様相は、千葉県南端の安房地域との類似性を指摘することができる。但し、現下の資料的状況では、安房の事例が伊豆南部出土例より先行するようであり、伊豆諸島を望む南房総市小滝涼源寺遺跡では、４世紀後半から５世紀中頃に営まれた複数の祭祀跡に、火を焚いた痕跡が伴っていた（小川・大渕編1989）。また、これは館山湾に面した例だが、５世紀中頃から末にかけての館山市加賀名遺跡でも、焚火の痕が確認されている（杉江編1999）。なお、安房では若干の高塚古墳が見られる一方、洞穴墓も複数存在しており、

館山市の大寺山洞穴墓のように、５世紀前半から７世紀前半まで埋葬行為が認められる例がある（岡本2003）。この大寺山洞穴墓では、12基ほどの舟棺が出土しており、５世紀代の甲冑や、鉄製武器・武具類などが副葬されていた。ここには、黒潮圏を活動の舞台にした「海人」首長の姿が彷彿とされるが、恐らく白浜周辺の首長も、彼らと同様の性格を有していたに違いない。

ところで、７世紀後半に神郡とされた安房国安房郡について通史的な検討を行った笹生衛氏は、常陸・陸奥方面へ抜ける海上交通の要としてヤマト政権の注目を得た４世紀後半以降、漁撈・農耕に関わる祭祀や、郡域の農業基盤が形成されていった６世紀後半から７世紀前半までの姿を描き出した（笹生2010ａ）。同じような地政学的条件にある伊豆国賀茂郡に関しては、資料的な制約が大きく、具体的な状況の復元に些かの難がある。しかし、６世紀後半には、下田港を擁する稲生沢川河口に了仙寺洞穴墓が営まれており、集落中枢域も可耕地の乏しい白浜に代わって、稲生沢川流域などが重視された可能性があろう。残念ながら、稲生沢川流域は早くから市街地化したため、考古学的な検討を及ぼすことが難しいものの、大賀茂川流域には洗田遺跡があり、後に賀茂郡賀茂郷の中心となった南伊豆町域まで目を向ければ、青野川流域の日詰遺跡や日野遺跡、あるいは湊の下条遺跡などで祭祀行為が行われていた（外岡1978・1992）。従来、祭祀遺跡と奉賽集団の関係や、その背景にある具体的な生産基盤の展開過程については論じられることが少なかったが、古墳時代中期から後期にかけての既存資料を軸に、かかる視点からの再検討を行っていくことが肝要であろう。

古墳時代から中世の火達山

火達祭が行われていた火達山からは、縄文時代の土器や貝輪をはじめ、中世の土師質土器などが採集されてきたが（大場1943、静岡県教育委員会文化課1988、下田市史編纂委員会2010）、『伊古奈比咩命神社』で報告されていた土師器を実見したところ（図版１－ｉ・ｊ）、６世紀後半から８世紀まで見られる駿東型甕である可能性が指摘できた（第４図－３～７）。これらの残片を、直ちに何らかの祭祀行為があった証拠と看做すわけにはいかないものの、「大正七年二月十五日同地で完形の古鉾一枚を拾ひ、今年二月七日また同質の鉄片を得た。」という足立鍬太郎氏の記録と併せて考えると（足立1920）、極めて興味深い状況が見えてくる。というのも、武器・武具・農工具や鉄鋌などの鉄製品は、令制祭祀の幣帛に繋がる供献品に含まれるものであり（笹生2010ｂ）、やはり祭祀遺跡の存在を疑うほかないのである。東京都大島町の和泉浜遺跡Ｃ地点や、新島本村式根島吹之江遺跡でも（吉田ほか1987、内川・山本編1995）、７世紀後半から８世紀代の鉄製武器類を伴う祭祀遺構が形成されており、半島と諸島で相互に遥拝し合うような形が、火達祭の原型になったのかもしれない。

もっとも、火達山遺跡出土資料の主体を占めているのは、11世紀から12世紀頃にかけてのロクロ成形された土師質土器である。この時期は、ちょうど鎌倉幕府成立の前後に当たり、三島市三嶋大社境内遺跡や、北条氏の本拠地である伊豆の国市御所之内遺跡などでも、同時期のものと見られる類似の供膳具が出土している。一方、三嶋社・走湯山・箱根権現や御所之内遺跡で確認されているような、13世紀後半前後の白色かわらけは含まれておらず（池谷2004）、名社とはいえども二所詣の対象となった社寺とは一線を画していたらしい。

屋外で用いられた御正躰と和鏡

その後の白濱神社で認められる考古学的な祭祀跡としては、文化９（1812）年に本殿裏から出土した御正躰と和鏡がある。これは、12世紀前半から13世紀前半の和鏡４面と、嘉祿元（1225）年銘の若宮御正躰が、老松の根元から出土したものであり、伊豆諸島における積石塚、あるいは屋敷神の状況と共通する。中世の早い段階に、白浜と伊豆諸島で共通したマツリの形があった可能性を、ここに指摘することができよう。ちなみに、若宮御正躰の施主である忌部氏については、伊豆での活動が知られておらず、以前から安房の忌部氏である可能性が指摘されてきた（大場1943）。館山市の大寺山洞穴墓でも和鏡が出土しており（千葉大学文学部考古学研究室編1994）、先に見た古墳時代における状況と併せて、伊豆と阿波の関係についても追及していく価値があろう。

これら５面の出土鏡について、平田篤胤の『白濱神社略縁起』が「五社の御正躰」と看做したのは付会であろうが（大場1943）、考古資料の信仰的再評価という意味では重要な発言である。有銘の御正躰に線刻された「若宮」については、若宮八幡である可能性や、三嶋神の正后阿波神が生んだ物忌奈神である可能性もあるが、『三嶋大

明神縁起（三宅記）』に登場する随神「若宮」と考えるのが至極妥当であろう。康永２（1343）年の奥書を持つ『伊豆国神階帳』にも（三橋編1999）、後の『三宅記』に現れる「第三王子」といった神名が書き付けられており、13世紀から14世紀の段階で、既に15世紀前後の成立と考えられる『三宅記』所載の神名が現れている事実は、三嶋信仰の淵源を追求する上で無視できない。

なお、現地での資料観察段階では、水草双鳥鏡（第６図－38）の鏡面に径７㎝弱の丸い染みが認められたことから、そこに儀鏡（37）が重なっていたと考えた。平成22（2010）年度の当センター第１回企画展『伊豆半島・諸島における神社の成立と展開』でも、同様の見解を示している（内川・深澤・石井編2011）。しかし、整理作業中に、失われた柳樹双雀鏡（41）と儀鏡が、ほぼ同等の直径であることに気付いた。現物資料が失われている現状では、確実な検証は困難であるものの、今のところ二つの可能性があることを補記しておく。

境内の礫石経塚

また、拝殿左手には、ここで白濱経塚と呼んだ礫石経塚がある。北宋銭以外に共伴資料がなく、その造営年代は詳らかにし得ない。明らかに近世のものと看做す根拠も得られてはおらず、時期決定には慎重を期すべきであろう。実態は不明だが、白浜周辺では、高根山山頂の高根山経塚（№９）や、板戸の善福寺経塚（№12）といった礫石経塚も知られている（静岡県教育委員会文化課1988）。伊豆諸島でも、周溝を持つ東京都三宅村物見遺跡など（吉田編1983～2000）、中世塚墓のような礫石経塚が営まれている例もあり、地域を越えた比較検討が望まれよう。

以上、当調査では、古代三嶋神のマツリや、『三嶋大明神縁起（三宅記）』に描かれた世界観の背景を追求するための基礎資料を整理してきた。また、それらにまつわる古記録・論考を頼りに、白浜の信仰史についても瞥見してきたが、古墳時代後期から何らかの祭祀行為が火達山付近で行われていた可能性や、中世和鏡・礫石経塚から見えてくる伊豆諸島との関係、そして三嶋信仰・薬師信仰の問題などについては、今後も一層の検討が必要であろう。既に安房地域の研究で先鞭が着けられているように、祭祀遺跡を形成した奉賽集団や、その存立基盤についても充分な目配せが求められる。

資料調査と報告に当たっては、多くの方々からご協力を頂戴した。とりわけ、白濱神社の原嘉孝宮司には、格別のご高配を賜ったことを銘記しておきたい。報告には、なお誤謬もあろうかと思う。引き続き、地域資料との比較・点検を進めるとともに、関係諸賢のご指摘を俟つものである。（深澤）

引用・参考文献

青木豊・内川隆志編　1994a『神ノ尾遺跡』　國學院大學海洋信仰研究会

青木豊・内川隆志編　1994b『堂ノ山神社境内祭祀遺跡』　利島村教育委員会

青木豊・内川隆志・粕谷崇編　1994『鳥打遺跡・宇津木遺跡調査報告書』　八丈町教育委員会・國學院大學海洋信仰考古学研究会

青木豊・内川隆志・金成南美子編　1999『八幡神社境内祭祀遺跡』　國學院大學考古学資料館

青木豊・内川隆志・須藤友章編　2005『阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡』　利島村教育委員会・國學院大學海洋信仰研究会

足立鍬太郎　1920「白濱神社祭神論 附來宮子神考」『國學院雑誌』第26巻第６号・第７号

足立鍬太郎　1928『南豆神祇誌』　南豆神祇誌

足立鍬太郎編　1930『靜岡縣史』第一巻　静岡県

池谷初恵　2004「東国境界域の白いかわらけ」『中世東国の世界２』　高志書院

池谷初恵　2008「伊豆地域におけるかわらけの変遷とその背景」『地域と分化の考古学Ⅱ』　六一書房

伊藤裕偉　2000「中世成立期における伊勢の土器相」『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告212　三重県埋蔵文化財センター

稲村坦元・豊島寛彰　1958「三宅御蔵島の社寺史跡その他」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第１分冊　東京都文化財調査報告書６　東京都教育委員会

植松勇介　2010「静岡県内における伝世鏡・出土鏡の基礎資料集成」『紀要』第３号　(財)伊豆屋伝八文化振興財団

内川隆志・山本哲也編　1995「伊豆大島和泉浜遺跡Ｃ地点―第２次・３次調査の概要―」『國學院大學考古学資料館紀要』第12輯

内川隆志・深澤太郎・石井匠編　2011『伊豆半島・諸島における神社の成立と展開』　國學院大學伝統文化リサーチセンター企画展報告（『研究紀要』第３号）　國學院大學伝統文化リサーチセンター

大形石棒研究グループ編　2011『大形石棒の基礎的研究(仮)』　國學院大學学術資料館

大場磐雄　1943『伊古奈比咩命神社』　伊古奈比咩命神社々務所

大場磐雄　1960「神道考古学生い立ちの記」『具体例による歴史研究法』　吉川弘文館

大場磐雄　1967「上多賀宮脇遺跡」『熱海市史』上巻　熱海市役所

岡本東三　2003「大寺山洞穴遺跡」『千葉県の歴史　資料編 考古２』　(財)千葉県史料研究財団

小川和博・大渕淳志編　1989『小滝涼源寺遺跡』　朝夷地区教育委員会・白浜町

小野愼一　1972「上多賀宮脇祭祀遺跡」『熱海市史』資料編　熱海市役所

北川恵一　1988「駿東型の甕の初源と終末について」『沼津市博物館紀要』12　沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

國學院大學学術フロンティア実行委員会編　2004『「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』　平成15年度國學院大學学術フロンティア構想　國學院大學学術フロンティア実行委員会

國學院大學伝統文化リサーチセンター　2011『大場磐雄博士資料目録Ⅲ』　國學院大學伝統文化リサーチセンター

桜井清彦・杉山荘平・神尾明正　1962「エビス島遺跡」『伊豆下田』　地方史研究所

佐藤公保　1986「中世土師器研究ノート（１）」『年報』昭和60年度　(財)愛知県埋蔵文化財センター

佐藤公保　1987「中世土師器研究ノート（２）」『年報』昭和61年度　(財)愛知県埋蔵文化財センター

佐藤達雄　1990「伊豆半島における古代製鉄遺跡」『研究紀要』Ⅲ　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

佐藤民雄・長田實　1937「南豆の夷子島の古代祭祀遺物」『上代文化』第15輯　國學院大學考古學會

笹生衛　2010ａ「祭祀遺跡の分布と変遷から見た東国神郡の歴史的背景」『國學院雑誌』第111号第３号

笹生衛　2010ｂ「古墳時代における祭具の再検討」『研究紀要』第２号　國學院大學伝統文化リサーチセンター

静岡県教育委員会文化課　1988『静岡県文化財地名表Ⅰ』・『静岡県文化財地図Ⅰ』　静岡県教育委員会

下田市教育委員会編　1982『下田の美術工芸品』　下田市

下田市史編纂委員会　2010『下田市史』資料編一　下田市教育委員会

杉江敬編　1999『加賀名遺跡』総南文化財センター調査報告第40集　(財)総南文化財センター

鈴木敏中編　1990『三嶋大社境内遺跡Ⅰ』　三島市教育委員会

鈴木敏則　1995「駿河・伊豆の埴輪」『転機』６号　転機刊行会

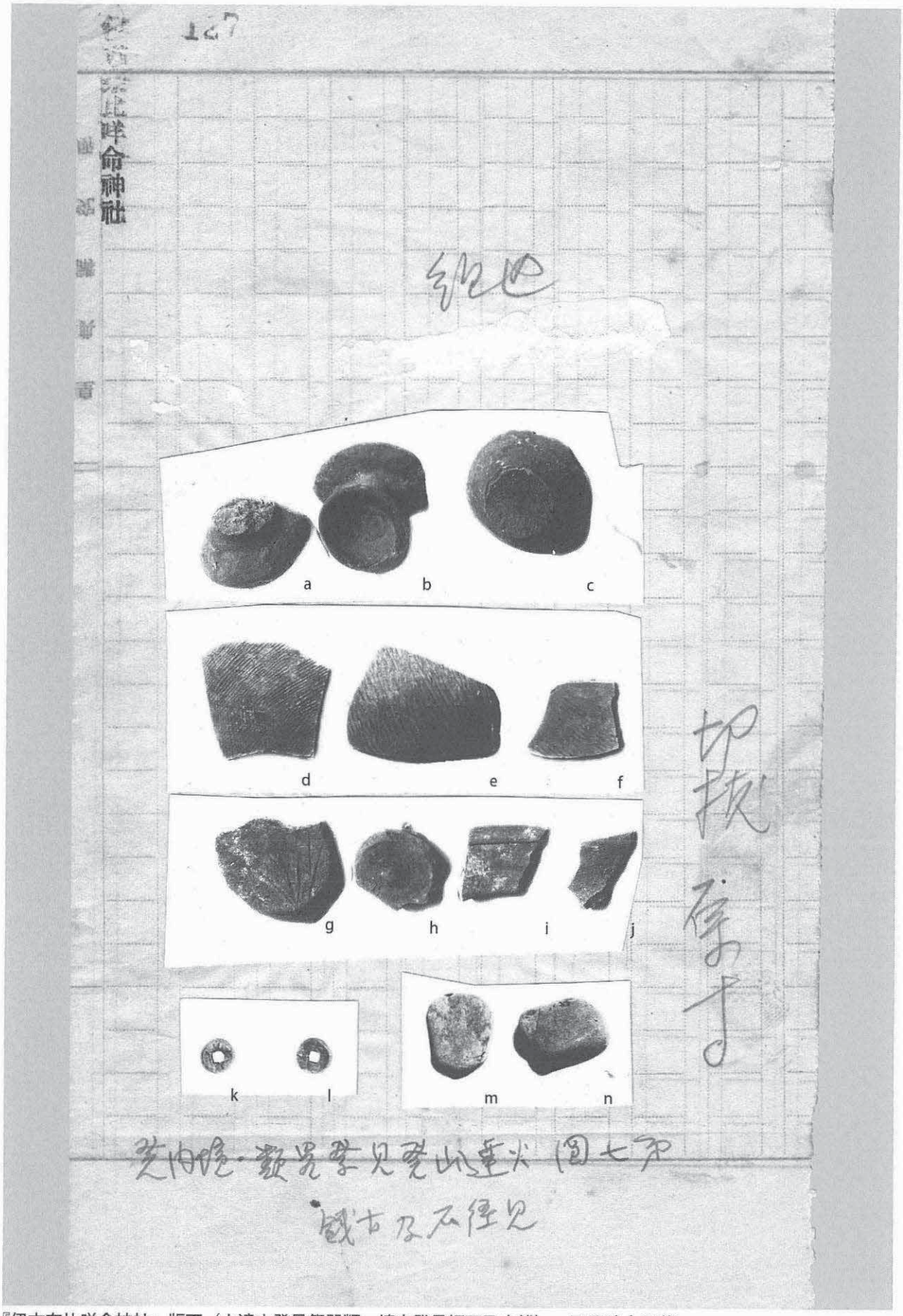
瀬川裕市郎　1981「静岡県東部地域における奈良時代の様相」『シンポジウム盤状坏』　東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会

谷川磐雄　1927「南豆に於ける特殊遺跡の研究（上）」『中央史壇』第13巻第６号

千葉大学文学部考古学研究室編　1994『大寺山洞穴　第１次発掘調査概報』　千葉大学文学部考古学研究室

辻真人編　1997『三嶋大社境内遺跡第３地点』　三島市教育委員会

土隆一編　2010『新版 静岡県 地学のガイド』地学のガイドシリーズ24　コロナ社
土岐昌訓　1981「三嶋大明神縁起の成立背景」『神道宗教』第105号　神道宗教学会
外岡龍二　1978「伊豆の祭祀遺跡」『駿豆考古』第20・21号合併号　駿豆考古学会
外岡龍二　1992「南伊豆の祭祀遺跡」『海と列島文化』第７巻　小学館
長島健・日野一郎　1962「金工と石造品」『伊豆下田』　地方史研究所
原秀三郎　1993『三嶋大社関係文書目録』静岡県文化財調査報告書第46集　静岡県教育委員会
深澤太郎　2009「三嶋神と『三宅記』のアルケオロジー」『研究紀要』第１号　國學院大學伝統文化リサーチセンター
深澤太郎　2010「三嶋明神と「薬師堂」のジオグラフィー」『研究紀要』第２号　國學院大學伝統文化リサーチセンター
藤本強・内川隆志・須藤友章編　2006『伊豆山経塚遺跡』　國學院大學考古学資料館・熱海市教育委員会
藤本強・内川隆志・須藤友章編　2007『走湯権現関連遺跡群遺物調査報告書』　國學院大學考古学資料館・熱海市教育委員会
降矢哲男・佐々木満・山下孝司　2001「山梨県内における中世の土器様相について」『中世土器研究論集』　中世土器研究会
三橋健　1978「三嶋大明神縁起」『國學院大學紀要』第16号　國學院大學
三橋健編　1999『国内神名帳の研究　資料編』　おうふう
三宅村教育委員会編　2008『三宅村郷土資料館』(パンフレット)　三宅島郷土資料館
宮本達希　1984「伊豆半島南部における洞穴遺跡と古墳」『静岡県考古学研究』16　静岡県考古学研究
森谷ひろみ　1977『武内社の歴史地理学的研究』　森谷恵
八峠興　2001「柱状高台考」『中世土器研究論集』　中世土器研究会
吉田恵二編　1982『中郷遺跡』　國學院大學考古学研究室
吉田恵二編　1983～2000『物見処遺跡』　國學院大學考古学研究室
吉田恵二ほか　1987a『吹之江遺跡』新島本村文化財調査報告書第２集　新島本村教育委員会
吉田恵二・前田光雄編　1987b『吹之江東遺跡』　東京都教育委員会

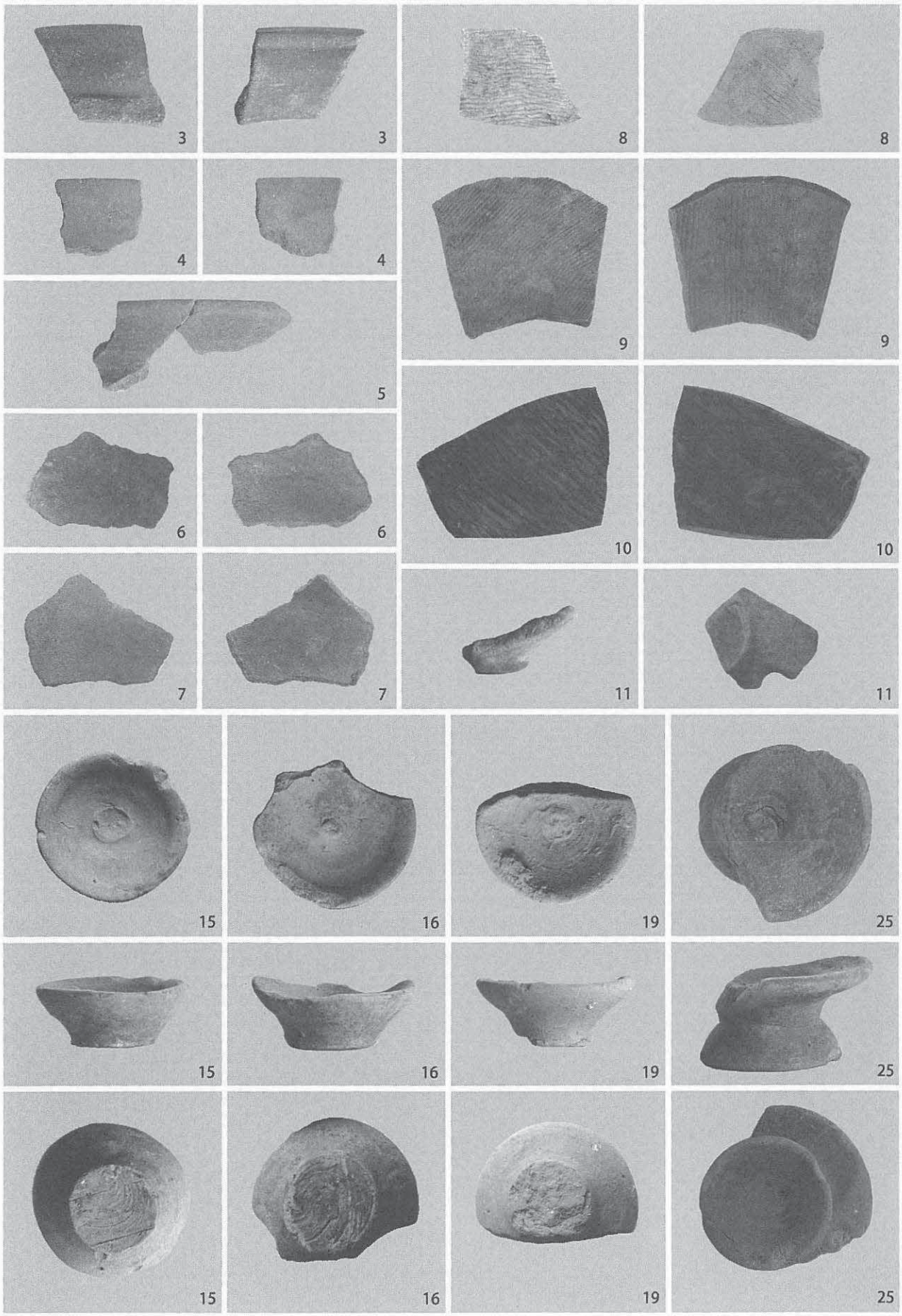


『伊古奈比咩命神社』版下（火達山発見祭器類・境内発見經石及古錢）　國學院大學蔵

図版２

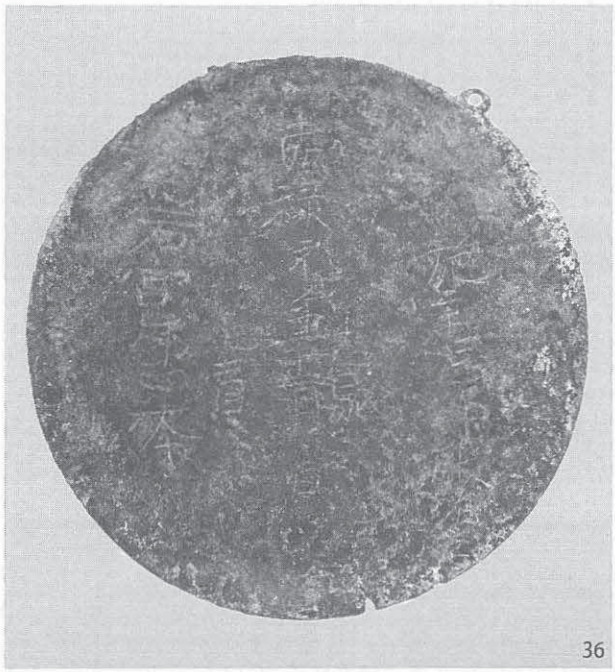
原田遺跡出土資料

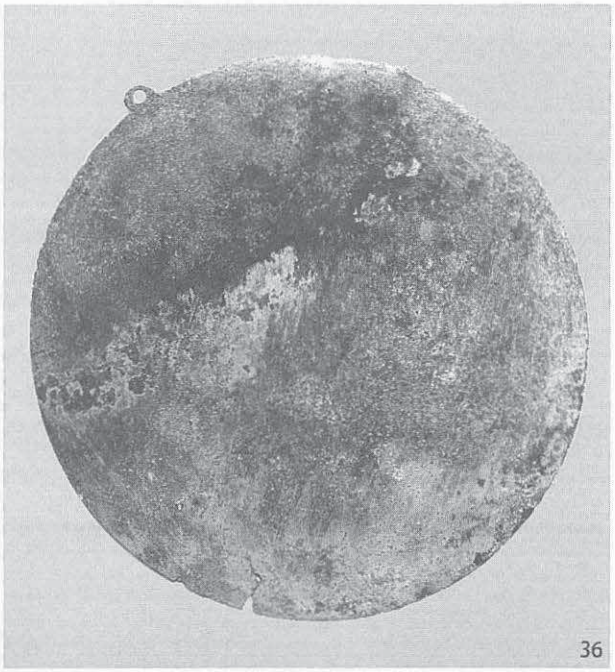
小長田神明遺跡出土資料

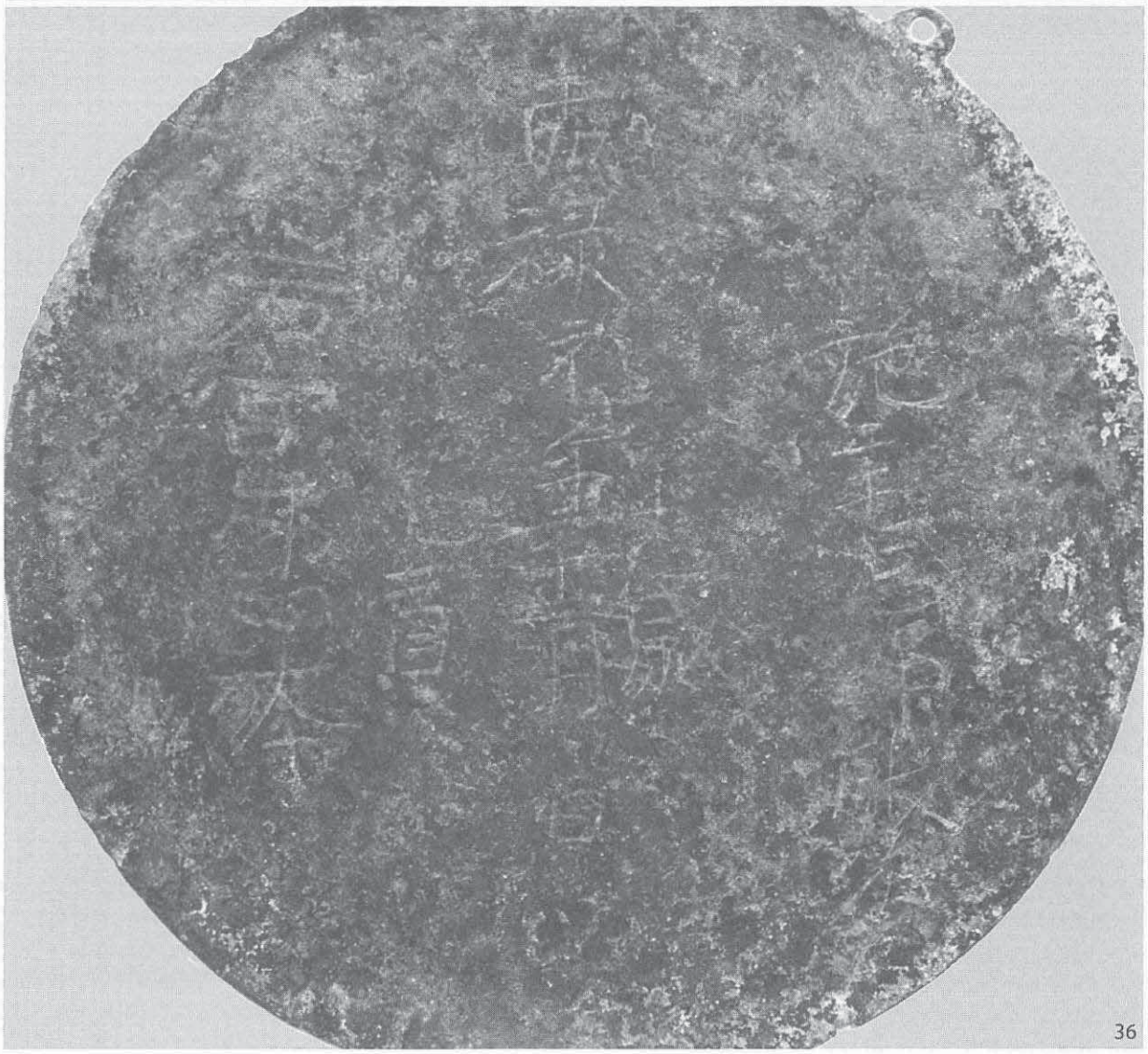


火達山遺跡出土資料

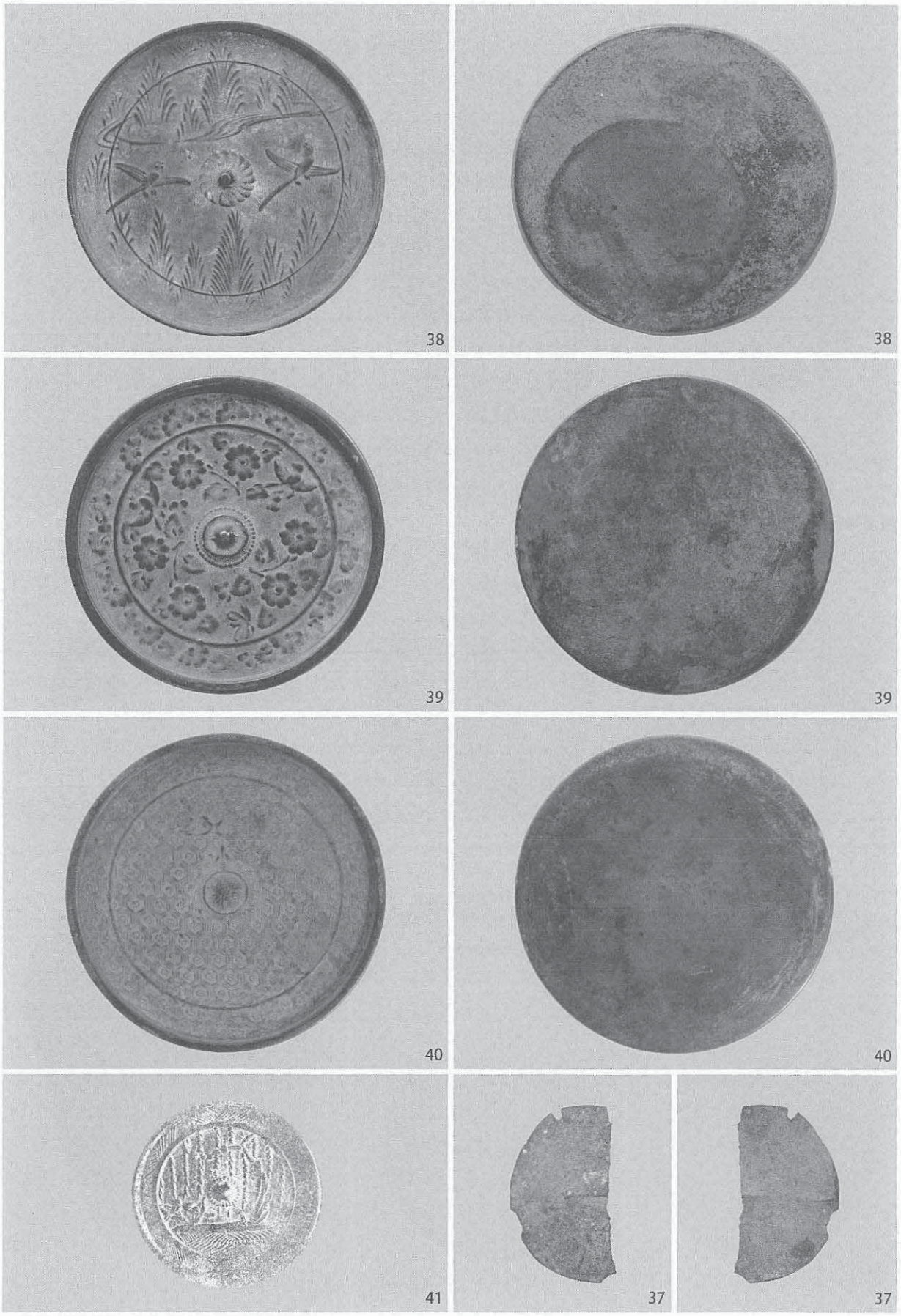
図版４





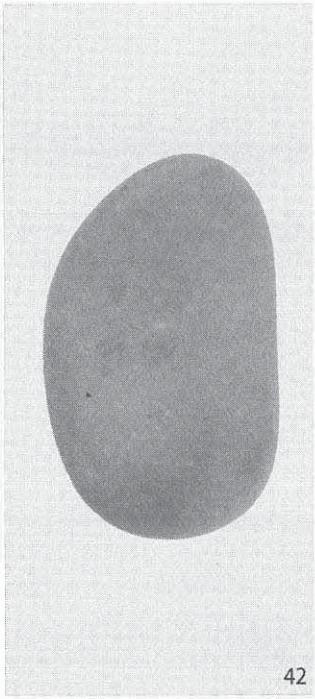


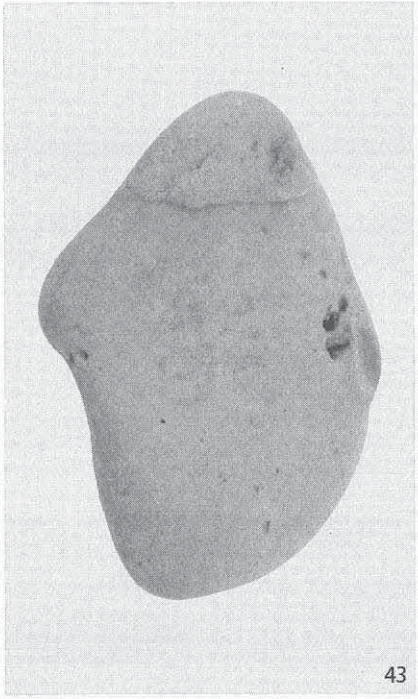
白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料１



白濱神社境内遺跡 古宮山地区出土資料２

図版６


42


43

44

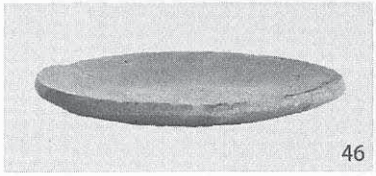
白濱神社境内遺跡 白濱経塚出土資料

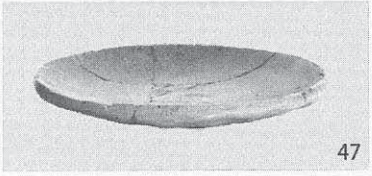
46

47

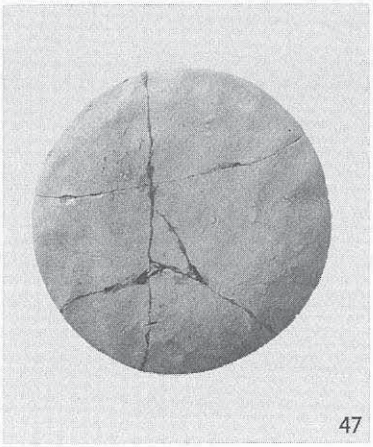
45

45


46


47

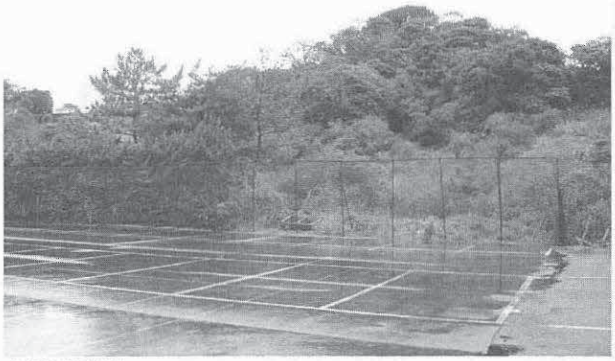
46


47

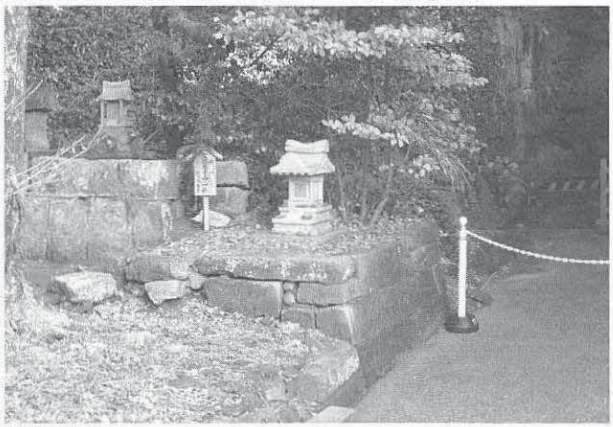
48

出土地不明資料

白濱神社境内の遺跡（No.19 火達山遺跡、No.20-1 白濱神社境内遺跡 古宮山地区、No.20-2 同 白濱経塚）



火達山遺跡



白濱経塚

伝旧社地 神明（『伊古奈比咩命神社』版下より）

資料保管状況

資料編　下田の和鏡

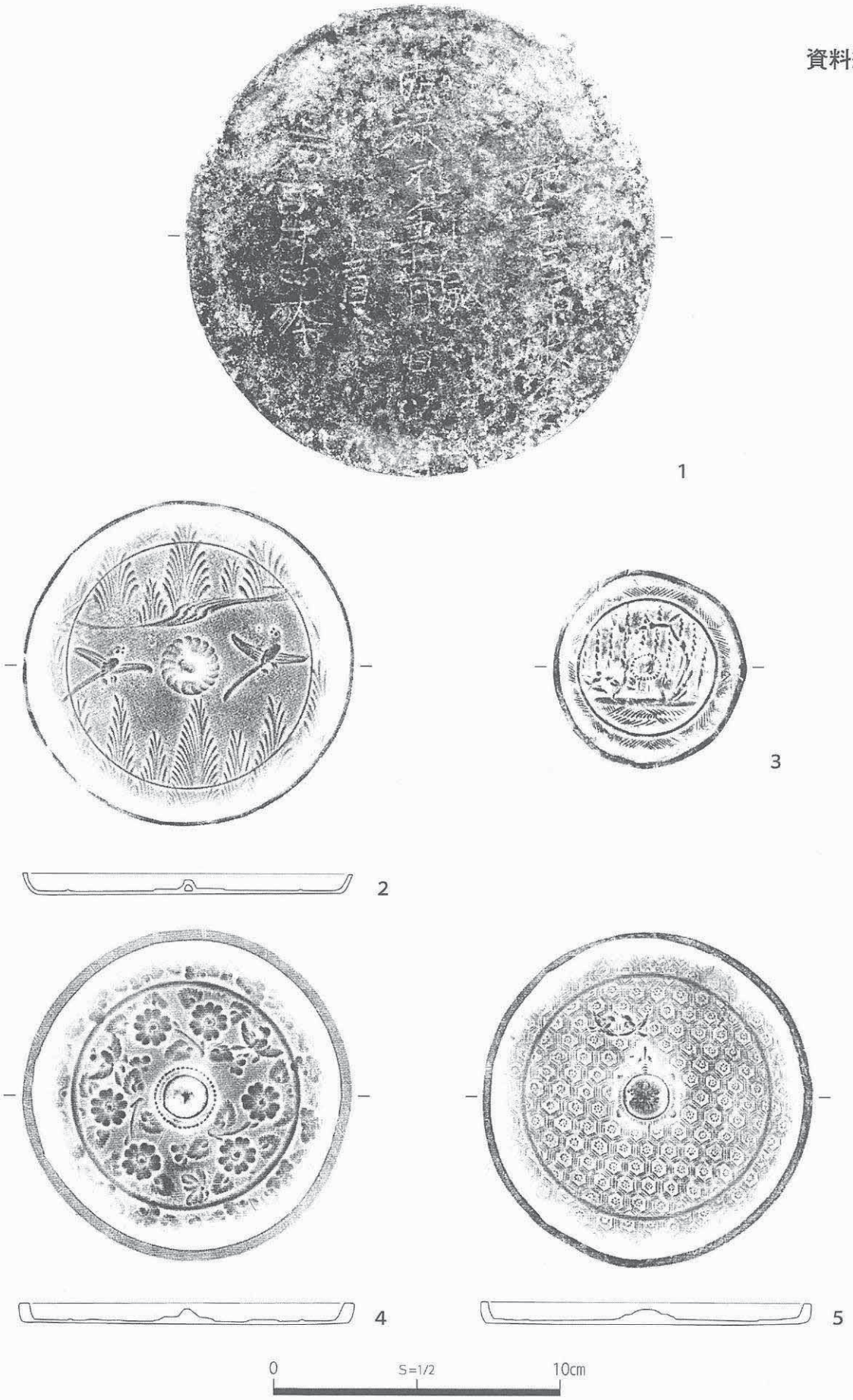
下田市域で確認されている和鏡は、総数20面に及び、その大半は神社伝世鏡である（大場1943、長島・日野1962、下田市教育委員会編1982、植松2010）。内訳は、両神社３面、日枝神社５面、戸崎八幡神社１面、湯原八幡神社４面、諏訪神社２面、個人蔵１面であり、白濱神社では先に報告した出土伝世鏡５面（１面は亡失）が確認されている。

時期的に最も古い資料は、水草双鳥鏡［資料編鏡№２］で、12世紀前半から中頃に遡る。平田篤胤が著した『白濱神社略縁起』によると、忌部能次が奉納した嘉禄元（1225）年刻銘御正躰［資料編鏡№１］のほか、３面の和鏡［資料編鏡№３～№５］と共に、文化９（1812）年９月に白濱神社奥山の老松下から掘り出されたものと伝聞される（大場1943）。須崎の両神社に伝わる橘散双鳥鏡［資料編鏡№６］は、径19.9cmの大形鏡で12世紀後半に遡る。伊豆地域に伝世する３面の大形鏡の一つで（植松2010）、白銅質であるが図様の表出はややあまく、鋳肌が荒れているところをみると火中している可能性も否定できない。所謂蒲鉾縁を呈し、素鈕である。鏡背文様は内外区にわたって橘樹枝を展開させ、間地に飛遊する二羽の禽鳥は鈕を挟んで配置される。樹枝は概ね三本一組とし、中央の一枝は上方に伸出する。日枝神社伝世鏡は、13世紀から15世紀に収まる一群である。何れも希少性の高い資料群である。柳枝松葉双雀鏡［資料編鏡№９］は、簾状に配される柳枝と松葉を対向させ四分割とした稀覯な図様構成をとるもので、13世紀前半に帰属する。梅樹双雀鏡［資料編鏡№10］は、洲浜から伸びるデフォルメされた梅樹を表現し、樹下には双雀が配される。13世紀前半から中頃に帰属する。三ツ鱗地文双雀鏡［資料編鏡№11］は、所謂擬漢式鏡で外区は三重の鉅歯文帯によって区画する。湯原八幡神社伝世鏡は、14世紀後半の擬漢式鏡を２面［資料編鏡№15・№16］含む一群であり、内区の一部を欠失するもの［資料編鏡№16］を含む。諏訪神社伝世鏡のうち、水草双鳥鏡［資料編鏡№18］は、内外区一面に流水と水草を交互に配置する図様構成を取るもので、13世紀前半に帰属する。松藤双雀鏡［資料編鏡№19］は、松樹にからむ藤から長く垂れる藤花を表現するもので、洗練された画面構成を採用する。進士氏蔵の菊花銀杏葉双雀鏡［資料編鏡№20］は、15世紀後半以降に帰属する。

以上、下田市域の神社奉納鏡を中心とする和鏡群を概観したが、総じて図様の希少なものが多く存在することと、奉納時期は概ね13世紀から15世紀であることが確認できた。（内川）

下田市出土・伝世和鏡一覧

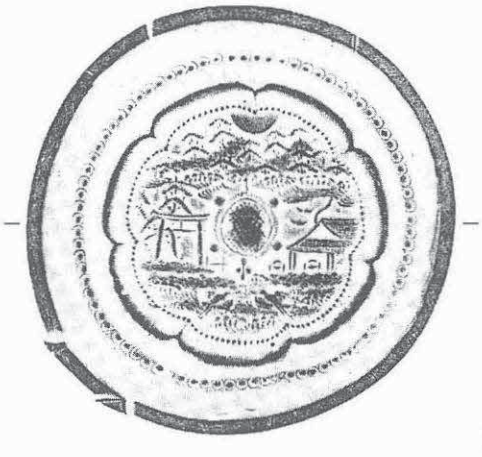
No.	出土伝世地・保管者	所在地	時期	名称	縁式	鈕式	界圏	面径(cm)	縁高(cm)	備考
1	白浜神社境内遺跡	白浜(原田)	嘉禄元(1225)年	御正躰	—	—	—	14.9	—	市文化財
2	白浜神社境内遺跡	白浜(原田)	12ｃ前～中	水草双鳥鏡	外傾式細縁	捩菊中隆鈕	単圏(細)	11.1	0.7	市文化財
3	白浜神社境内遺跡	白浜(原田)	13ｃ前	柳樹双雀鏡	直角式中縁	捩菊中隆鈕	単圏(中)	6.8	0.5	亡失
4	白浜神社境内遺跡	白浜(原田)	13ｃ前	山吹鳥蝶鏡	直角式中縁	花蕊中隆鈕	単圏(中)	11.6	0.7	市文化財
5	白浜神社境内遺跡	白浜(原田)	13ｃ中～後	亀甲地文双雀鏡	直角式中縁	亀鈕	単圏(細)	11.6	0.7	市文化財
6	両神社	須崎	12ｃ後	橘散双鳥鏡	蒲鉾縁	素円鈕	単圏(細)	19.9	0.6	
7	両神社	須崎	13ｃ中～後	菊花散双雀鏡	直角式中縁	亀鈕	単圏(中)	11.7	0.8	
8	両神社	須崎	15ｃ前	住吉鏡	直角式中縁	亀鈕	特殊圏	11.4	0.85	
9	日枝神社	横川(八楠)	13ｃ前	柳枝松葉双雀鏡	—	花蕊中隆鈕	単圏(中)	11.4	0.95	孔×１
10	日枝神社	横川(八楠)	13ｃ中	梅樹双雀鏡	—	花蕊中隆鈕	単圏(中)	11.4	0.95	孔×２
11	日枝神社	横川(八楠)	14ｃ後	三ツ鱗地文双雀鏡	—	亀鈕	特殊圏	11.1	0.8	孔×１
12	日枝神社	横川(八楠)	15ｃ前	菊花散双雀鏡	—	花文亀鈕	特殊圏	9.8	0.65	
13	日枝神社	横川(八楠)	13ｃ前	菊花散双雀鏡	—	捩菊中隆鈕	単圏(中)	7.9	0.85	孔×１
14	戸崎八幡神社	箕作(戸崎)	14ｃ後	浮線稜双雀鏡	—	花文亀鈕	特殊圏	10.8	0.7	
15	湯原八幡神社	河内(湯原)	14ｃ後	瑞花双鳥鏡	—	花蕊中隆鈕	特殊圏	11.6	0.4	孔×１
16	湯原八幡神社	河内(湯原)	15ｃ前	梅花双雀鏡	—	欠損	特殊圏	10.5	0.75	残欠
17	湯原八幡神社	河内(湯原)	14ｃ	亀甲地文双雀鏡	—	亀鈕	単圏(中)	10.4	0.95	
18	諏訪神社	河内(諏訪)	13ｃ前	水草双鳥鏡	—	花蕊中隆鈕	単圏(中)	11.7	1.0	孔×２
19	諏訪神社	河内(諏訪)	13ｃ前	松藤双雀鏡	—	花蕊中隆鈕	単圏(細)	11.4	0.7	孔×１
20	進士氏蔵	白浜(長田)	15ｃ後	菊花銀杏葉双雀鏡	—	亀鈕	二重圏	7.4	0.3	



白濱神社境内遺跡 古宮山地区（同社蔵）　1：若宮御正躰、2：水草双鳥鏡、3：柳樹双雀鏡（長島・日野 1962）、4：山吹鳥蝶鏡、5：亀甲地文双雀鏡

6

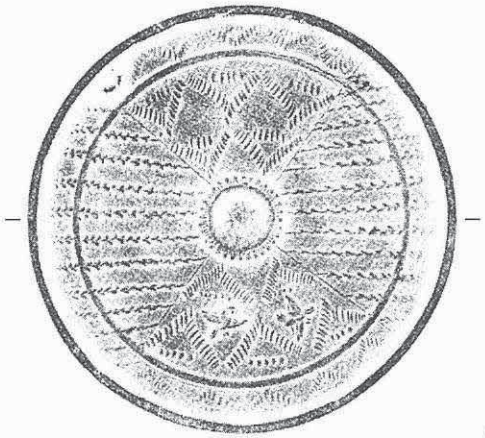
7



8

0　S=1/2　10cm

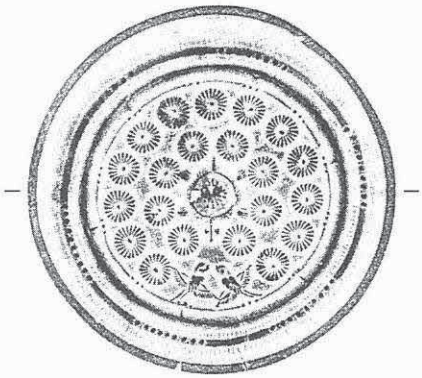
両神社（同社蔵）　6：橘散双鳥鏡（長島・日野 1962）、7：菊花散双雀鏡（長島・日野 1962）、8：住吉鏡（長島・日野 1962）



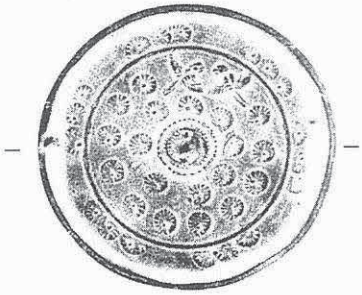
9

10

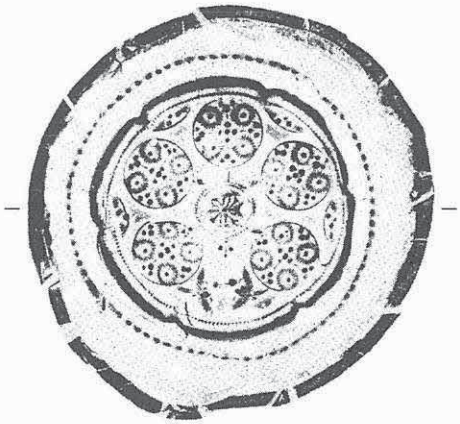
11



12



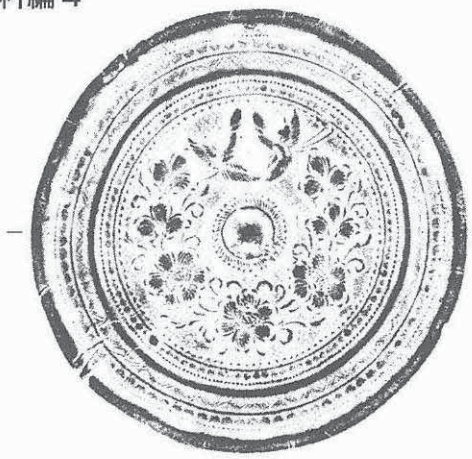
13



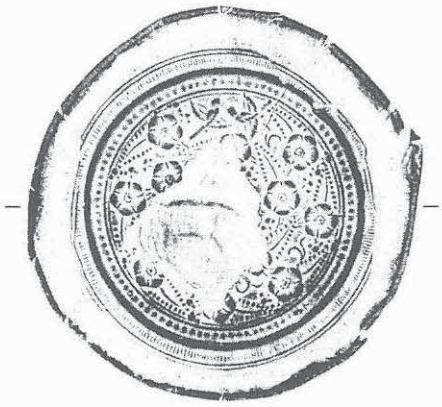
14

0　S=1/2　10cm

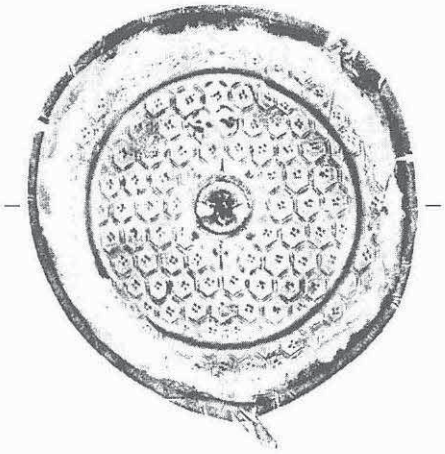
日枝神社（同社蔵）　9：柳枝松葉双雀鏡（長島・日野 1962）、10：梅樹双雀鏡（長島・日野 1962）、11：三ツ鱗地文双雀鏡（長島・日野 1962）、12：菊花散双雀鏡（長島・日野 1962）、13：菊花散双雀鏡（長島・日野 1962）　**戸崎八幡神社（同社蔵）**　14：浮線稜双雀鏡（長島・日野 1962）



15

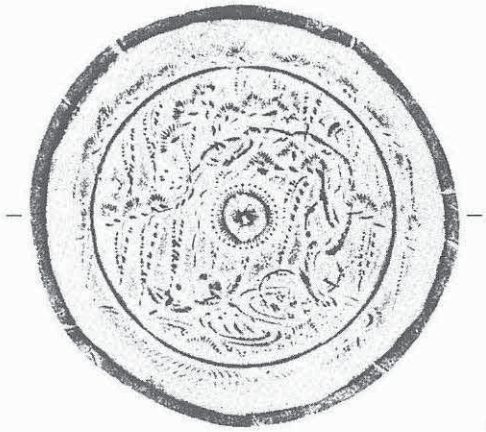


16



17

18



19

20

0　S=1/2　10cm

湯原八幡神社（同社蔵）　15：瑞花双鳥鏡（長島・日野1962）、16：梅花双雀鏡（長島・日野1962）、17：亀甲地文双雀鏡（長島・日野1962）、**諏訪神社（同社蔵）**　18：水草双雀鏡（長島・日野1962）、19：松藤双雀鏡（長島・日野1962）　**進士氏蔵**　20：菊花杏葉双雀鏡（長島・日野1962）